

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県宮古島平良方言のフォネーム

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久, かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2400

沖縄県宮古島平良方言のフォネーム

かりまた しげひさ

1.1. はじめに

平良市は、宮古島、大神島、池間島、伊良部島、下地島、来間島、多良間島、水納島などの宮古諸島の中心である宮古島にある。かつては、首里王府の役所であった蔵元があり、現在は、沖縄県庁の宮古支庁がある。空港、港などがあり、政治経済の中心地である。平良市をふくむ宮古郡は、城辺町、上野村、下地町、伊良部町、多良間村の1市3町1村からなる。その人口は全体で5万3千人で、平良市の人口は3万7千人である。

平良（方言名/pɪsara/）は古くは、市街地をなしていた東仲宗根、西仲宗根、西里、下里、荷川取の五箇字をさしていたようである。現在の「平良市」は、大神島や池間島をはじめとして、北の狩俣、島尻、南の久松（旧松原と旧久貝）など、方言的にはことなる地域をふくんでいる。ここでは、「平良方言」をせまい意味での、すなわち、旧市街地の五箇字の方言をさして使用することにする^(註1)。平良方言は宮古諸方言の中央方言として周辺地域に対する影響力をもつ方言であり、この方言にはかつて士族とよばれた人々が使用した独特の語彙がある。その語彙のなかには、あきらかに沖縄方言の影響をうけていて、農村の人々の使用する方言には見られないものがふくまれているようである。

/asagi/隠居した老夫婦が住む離れ。(/?asjagi/首里方言)^(註2)

/ucɪbaru/裏座敷。(/?uucibaru/首里方言)

/gusi:/御神酒。(/gusii/首里方言)

/di:ngu/梯梧。(/diigu/首里方言)、本来は/dufkɪgi:/という。

1 平良方言は、本永守靖(1974)「平良方言の音韻法則」、本永守靖(1978)「平良方言の動詞の活用」などをはじめとして、宮古方言のなかでもよく調査、研究された方言であり、ことわざ集、歌謡集などのテキストも多い。

2 首里方言の例は国立国語研究所編(1963)『沖縄語辞典』から。

本稿では、平良市西里、下里での調査でえられた資料を中心にのべることにする。おもなインフォーマントは、砂川スエ氏（明治39年生まれ、西里出身）、砂川トヨ氏（明治43年生まれ、西里出身）、下地明増氏（大正7年生まれ、下里出身）、下地文氏（大正12年生まれ、下里出身）の4名である。西里と下里には、音韻的な差異はなく、また、この方言における男女差は、語彙の面で、それぞれ詳しい分野があるといった程度の差である。

1.2. 平良方言のフォネーム

現代日本語の母音フォネームと子音フォネームを上村幸雄(1978: 291)ではつぎのように定義している。

標準語の母音フォネームは、標準語の子音フォネームから、調音-音響的には、規範的な発音の代表的なアロフォンにおける、口蓋帆のもちあがったさまたげのない声道における声の共振と、その結果としてのおおきなきこえをもつ周期的で持続性のある音響とによって区別される。また、標準語の母音フォネームは、標準語の子音フォネームから機能的には、上の調音-音響的な特徴にもとづいて音節において音節主音となることによって、また、単独で音節を形成する能力をもつことによって区別される。さらにそのうえ、その音節が単独で単語または語彙的あるいは文法的に有意義的な単位となりうるという点でも区別される。

平良方言には子音それ1個で2モーラの1音節を形成し、単独で単語をあらわす機能をもった子音がある。また、母音と結合せず、単独で1モーラの音節を形成して、語彙的、あるいは、文法的に有意義的な単位になることができる子音もある。また、音節をひらく位置にきた子音と結合して、音節主音として母音のように機能するが、摩擦音[s][z]の調音と基本的にはおなじように、声道における舌先と硬口蓋とのせばめによる噪音を特徴とする子音がある。

平良方言のばあい、調音的な観点からも、機能的な観点からも、母音フォネームを子音フォネームから区別して明確に定義するのは、現代日本語のばあいと

くらべても、奄美沖縄方言群のばあいとくらべてもむづかしい。しかし、すべてのフォネームを母音フォネームと子音フォネームとに分割しなければならぬとすれば、上村(1978)における現代日本語(以下、単に日本語とする)のフォネームの規定を参考に平良方言のフォネームをつぎのように規定する。

音節副音となる子音フォネームと結合して音節主音となり、1モーラの開音節を形成するフォネームを「みじか母音フォネーム」と規定し、2モーラの開音節を形成するフォネームを「なが母音フォネーム」と規定することにする。そして、それ以外のフォネームが子音フォネームである。

母音フォネームは、単独で、あるいは、音節をひらく子音と結合して音節主音になり、音節を形成することができる。そのとき、みじか母音フォネームは、音数律的に1モーラのみじかい音節を形成し、なが母音フォネームは、2モーラのがい音節を形成する。

平良方言は、モーラ(拍)にかぞえることのできる方言であるが、母音フォネームだけでなく、子音フォネームにも長短の対立があって、子音フォネームは「みじか子音フォネーム」と「なが子音フォネーム」にわかれる。

平良方言には単独で2モーラのがい音節をつくることのできる子音フォネームがある。これが「なが子音フォネーム」である。なが子音フォネームは、他のフォネームと結合して音節を形成することはない。

みじか子音フォネームは、音節副音として音節をひらく位置にきて、母音と結合して音節を形成するばあいと、他のフォネームと結合することなく、単独で音節を形成するばあいとがある。音節副音として音節をひらく位置にしかくことのできない子音フォネームを「音節をひらく子音フォネーム」とよぶ。また、単独で音節を形成できるだけでなく、音節をひらく位置にもくことのできる子音フォネームがある。これを「音節をひらき、かつ音節をつくる子音フォネーム」とよぶ(以下、単に「音節をつくる子音フォネーム」とよぶ)。この「音節をつくる子音フォネーム」が単独で形成する音節は、1モーラのみじかい音節である。

音節をつくる子音フォネームは、音節副音として音節をひらく位置にきて、母音フォネームと結合して音節を形成することもできる。なが母音フォネーム

と結合すれば2モーラの音節を形成し、みじか母音フォネームと結合すれば1モーラの音節を形成する。

平良方言の子音の音節形成能力を簡単に表にしめす。

	単独で音節を形成できる	単独で音節を形成できない
音節をひらくことができる	音節をつくる子音 m,n,f,v,s	音節をひらく子音 p,b,t,d,k,g,pj,kj など
音節をひらくことができない	なが子音 m:,n:,v:	

みじか母音フォネームをVで、なが母音フォネームをV:で、みじか子音フォネームをCで、なが子音フォネームをC:でしめすと、平良方言のフォネーム=音節構造はつぎのようになる。

- 1音節1モーラ C /mim/耳、/kuv/昆布、/mta/土
 V /aca/明日、/imi/夢、/utu/音
 CV /sata/砂糖、/butu/夫、/jama/山
- 1音節2モーラ C: /v:/売る、/m:/芋、/n:/うん、肯定の応答^(註3)
 V: /a:/粟、/i:/胃、/u:/追う、/o:/青い^(註4)
 CV: /ka:/皮、/mi:/目、/pu:/帆

平良方言のフォネームは以下にしめすとおりである。

母音フォネーム

みじか母音フォネーム /ɪ, i, a, u/

なが母音フォネーム /ɪ:, i:, e:, a:, o:, u:/

3 平良方言をはじめとする宮古諸方言、そして、おおくの琉球方言では「手」「目」「葉」などの日本語の1モーラ1音節の単語に対応する単語の母音がなが母音化していて、1モーラ1音節の単語は存在せず、音声的にもっとちいさい単語は2モーラ1音節である。

4 平良方言をはじめとする宮古諸方言では、形容詞の活用形のひとつに語幹をふたつかさねてつくるタイプがある。

/taka:taka/高い、/upu:upu/大きい、/pisi:pisi/寒い、/ka:ka:/軽い、/iv:iv/重い、
 /jam:jam/痛い、/n:n:/似ている

形容詞の「重複形」の最初の語幹の末尾は、なが母音、あるいは、なが子音になる。そして、形容詞が程度強調をうけると、2モーラ以上に低く強くなる。母音や子音をながく、しかもピッチは低く強くなるばす程度強調は、形容詞に限らず、副詞や感動詞にもみられ、宮古諸方言に顕著である。

子音フォネーム

みじか子音フォネーム /p, b, t, d, k, g, c, z, f, v, s, m, n, r,
pj, bj, tj, dj, kj, gj, cj, zj, fj, vj, sj, mj, nj, rj, j, kw, gw,
(w), (h)/

なが子音フォネーム /v:, m:, n:/

1.3. 母音フォネーム

/ɪ//i:/は、舌先母音で、舌先あるいは前舌の舌先よりの部分を歯茎あるいは歯茎よりの硬口蓋に接近させてつくる。上村(1989)がいうように、この母音の調音点は、D.Jonesの母音四角形のそとにある。/i//i:/と/e:/はともに前舌の母音で、/i//i:/がせま母音で、/e:/が半せま母音である。

/a//a:/は、ひろ母音である。/u//u:/は奥舌のせま母音で、/o:/は奥舌の半せま母音である。/u//u:/と/o//o:/はともに円唇で、それ以外の母音は、非円唇の母音である。みじか母音には半せま母音がない。

平良方言の母音フォネーム（以下「母音」）の特徴として、みじか母音がせま母音にかぎらず、ひろ母音も無声化することをあげることができる。この母音の無声化はなが母音にはみられない。母音の無声化は、無声子音に挟まれたときだけでなく、語末でもおこる。ただし、語末での無声化は、義務的ではなく、ていねいに、ゆっくりと発音されるときには無声化しないことがある。また、みじか母音の無声化は、平良方言話者のはなす日本語の発話のなかにも観察でき、方言には語例がない、半せま母音/e//o/も無声化する。

日本語の母音と平良方言の母音の対応は、つぎのとおりである。（日本語との対応をしめすとき、母音の長短を無視することがある。）

/a/ — /a/ [pana]花・鼻, [kaɽana]包丁（「刀」に対応）

/i/ — /ɪ/ [pʰɪgi]髭, [pʰɪdaɪ]左, [pʰɪtu]人

/u/ — /u/ [uɕ]牛, [ju:]湯, [muku]婿

/e/ — /i/ [i:]柄, [pi:]屁, [mi:]目, [tʰaki]竹

/o/ — /u/ [puni]骨, [pu:]帆, [mumu]物

うへの対応は基本的な対応であって、どんな子音と結合するかによって、あ

るいはその環境によって、ちがったタイプの音韻対応がみられる。

1.3.1. 舌先母音 /ɨ//ɨ:/

日本語の /i/ に対応してあらわれる平良方言の /ɨ/ は、舌先あるいは前舌の舌先寄りの部分を歯茎あるいは歯茎寄りの口蓋に接近させ、せばめをつくっている。/ɨ/ は、有声破裂音 /b//g/ と結合するとき、子音のでわたり=母音のいりわりに有声摩擦音 [z] が観察される。このアロフォンを [ɨ₁] と表記する。無声破裂音 /p//k/ と結合するとき、子音のでわたり=母音のいりわりに無声の摩擦音 [s] が観察される。このアロフォンを [ɨ₁'] と表記する。無声子音にはさまれたり、語末にきたりして無声化したアロフォンを [ɨ₁'] と表記する。/ɨ/ の摩擦は、語頭の音節で呼気がつよいと摩擦もつよくなり、語末では呼気のよわまりにともなって摩擦もよわくなる。摩擦のよわいアロフォンを [ɨ] と表記する。

[ɨ₁][ɨ₁'] は、摩擦音 [s][z] の調音と基本的におなじである^(註5)。たとえば [pɨstu] (人) は、2モーラの単語で、全体が [ps][tu] のふたつの音節からなる^(註6)。最初の部分では破裂音 [p] の発声のときすでに、舌先、あるいは前舌の舌先寄りの部分を歯茎あるいは歯茎寄りの口蓋に接近させていて、そこからそのままつぎの [t] へ移行するのである。音節主音的な [s] と無声化した舌先母音 [ɨ₁'] とは同一のものであって、そのちがいは音韻論的にいかにとらえるかというちがいである。ふたつのかんがえ方が想定できる。

第1のかんがえ方は、音声的な共通性を重視して、音節主音的な [s] も、音節副音になる /s/ のアロフォンとみるものである。/s/[s] が [k] や [p] に対して音節主音として機能していることになり、/pstu/ となる。このかんがえによれば、平良方言の摩擦音 /s/ は、母音と結合することなく独立性のつよい子音として語頭にきたり (C₁)、音節末の位置にきたり (C₃)、その子音単独ではモー

5 そのことについては、上村(1989)、かりまた(1999)などにも記述されている。

6 ネフスキー(1926)は、「人」を「pstu」、平良を「psara」と表記した。一方で、ネフスキーは [pɨtu] と表記している。後の研究者のおおくは後者の表記のみを採用し、/pɨtu/ ととらえた。舌先母音をめぐる研究史については、かりまた(1984)、かりまた(2002)にくわしいので、それを参照していただきたい。

ラにかぞえられず、母音と結合してはじめて音節を形成し、音節副音として音節をひらく位置にきたり (C₂)、また、他の子音、すなわち/p//k/のような無声破裂音と結合して、1拍にかぞえられる音節を形成し、その音節主音となることができる子音ということになる^(註7)。/s/は、/su:/ (野菜) にみられる音節副音としても、/us/ (牛) の語末の/s/[s]のような成節的な子音としても、母音のように音節主音としても機能する、多機能な子音ということになる。

C₁ C₂ V₁ C₃

舌先母音/ɹ/が有声子音と結合するとき、アロフォン[ɹ₁]があらわれる。[ɹ₁]は、有声の摩擦音[z]と調音の位置、調音の方法がおなじである。[ɹ₁]を/s/とみるなら、[ɹ₁]を有声摩擦音[z]のアロフォンとみななければならない。そうすると、/ɹ/のアロフォン[ɹ₁]を/z/のアロフォン[z]とみることになる。そして平良方言の/z/は、/s/とおなじように次のようにC₁ C₂ V₁ C₃のいずれの位置にもくることができる「音節をつくる子音」のグループに入ることになる。

C₁ [zɹu]魚, [zzara]鎌, [zzan]叱らない

C₂ [zɹu]魚, [zzara]鎌, [paɹzan]入らない

V₁ [bɹda:bɹda]低い, [mɹz]右, [mugz]麦

C₃ [maz]米, [buduz]踊り,

そして、これまで2モーラのなが母音とした/ɹ:/をなが子音/z:/とみなさなければならないだろう。

[z:]飯, [z:sa]髻者, [baz:baz]悪い, [nabz:nabz]すべっこい

第2のかんがえは、音節主音として機能する[i]が母音/i/で、音節副音として機能する[i]が子音 (すなわち半母音/j/) であるのにならって、機能を重視してフォネームを決定するなら、音節主音としての[s]と音節副音としての[s]

7 「音節主音」とは、2個以上のフォネームからなるひとつの音節において、他のフォネームに対して相対的によくひびき、その音節の核となることのできるものである。[mi]における母音[i]がそういうものである。しかし、この母音[i]がよりきこえのおおきい母音[a]の前にきて、かたいむすびつきをなし、一つの音節を形成して、「音節副音」としてはたらくのが半母音/j/である。同様に、音節副音としてはたらく[u]が半母音/w/である。音節副音としての機能は子音に特徴的であり、半母音は、子音のグループに分類される。このとき、半母音は子音にふさわしい音声を実現するためよりせばめられたり、摩擦がつよくなったりすることがある。

を区別して、それぞれを別のフォネームとしなければならない。音節主音として機能する[s]を舌先母音/ɿ/とみるかんがえである。

ここでは、第2のかんがえ方をとって母音とみなし舌先母音/ɿ/とする^(註8)。[pʂtu]も[kʂmu]も2モーラの単語である。単語内において[pʂ][kʂ]が相対的に独立した、1モーラの音節としてとりだされる。音節内において[s]は音節主音として機能する「半子音 (semi-consonat)」とよぶべきものである^(註9)。

子音 (consonant) でありながら、きこえ度 (sonority) が高く、音節主音 (syllabic) としての働きをもつ音をいう。Broomfield (Language, G.121) によると、前後の音素 (phoneme) よりも、きこえ度の高い音素は音節主音であり、その他の音節は音節副音 (nonsyllabic) である。この中間に、音節主音にも音節副音にもなりうる、いくつかの音素があるが、これを響音 (sonorant[sonant]) と呼ぶ。響音には[l, n, r, w, j]がある。このうち、[r]は、red[red]では音節副音であるが、bird[brd]では音節主音の働きをしているので、半子音とみなすことができる。

『現代英語学辞典』(1973初版, 1975参版)

/ɿ/の日本語の各行のイ段の音節と平良方言の音節の対応は以下のとおりである。

/i/ — /ɿ/ [ɿ:]飯, [maɿ]米(「米(まい)」に対応)

/i/ [iɿ]犬, [itsɿtsɿ]五つ, [iftsɿ]いくつ

8 このかんがえは暫定的なものである。宮古諸方言には音節主音として機能する/m//f//v//l/が存在するので、それらを考慮にいれつつ、平良方言をはじめとする宮古諸方言の母音の定義を再検討しなければならない。平良方言だけを考えれば、/ɿ/とするのもいいのだが、他の宮古諸方言とあわせて考慮するなら、/s//z/も音節主音になることのできる、「音節をつくる子音」と認めたほうが整合性はでてくる。しかし、どっちにせよ、母音と子音の中間に位置するものである。

9 [pʂ][kʂ]の/ɿ/は、/s/とほぼおなじ調音方法によって生成されるが、音節副音としての破裂音[k][g]に比較して、せばめの程度がすくなく、相対的にきこえ度がたかいうえに、持続時間がながいので、音節主音として、あるいは成節的な子音として機能しうるのである。この点から、平良方言の[s]をひびき音のグループに入れることもできる。

/ki/ — /k₁/ [k¹mu]肝, [k¹n]着物(「衣(きぬ)」に対応)

/gi/ — /g₁/ [mḡ¹]右, [mug¹]麦

/si/ — /s/ [uʃ]牛, [ʃta]下

/zi/ — /z₁/ [dz₁]地, [pidz₁]肘, [ko:dz₁]麴

/ci/ — /c₁/ [ts₁]血, [ts₁kaf]近く, [m̥ts₁]道

/ni/ — /ni/ [ni:]荷, [nidz₁:]二十

/n/ [kan]蟹, [dʒin]お金(「錢(ぜに)」に対応)

/hi/ — /p₁/ [p¹gi]髭, [p¹da₁]左, [p¹tu]人

/bi/ — /b₁/ [kab¹]紙(「カビ」に対応)

/mi/ — /mi/ [mi:ts₁]三つ, [mim]耳

/m/ [m̥ts₁]道, [m̥dzu]溝, [mim]耳

/ri/ — /r₁/ [tu₁]鳥・酉(十二支), [ma:₁]毬

日本語の「ツ」「ズ(ヅ)」「ル」の音節の/u/に対応して、平良方言では舌先母音/ɿ/があらわれる。

/cu/ — /c₁/[ts₁mi]爪, [ts₁nu]角, [ts¹k¹]月

/zu/ — /z₁/[kidz₁]傷, [midz₁]水

/ru/ — /r₁/[pi₁]ニンニク(蒜(ひる)に対応), [ju₁]夜

/ɿ/は、結合する子音フォネーム(以下「子音」)に制限がある。破裂音/k, p, g, b/、破擦音/c, z/とは結合するが、その他の子音とは結合しない。すなわち、平良方言には、/f₁//v₁//m₁//n₁//r₁//j₁//w₁/などの音節は存在しない。

なが母音/ɿ:/は、つぎのような単語にあらわれる。

①日本語の1音節語に対応して。

[b¹ɿ:]亥(十二支), [dz₁:]地面, [dz₁:]痔

②形容詞の重複形のなかに。

[sab¹ɿ:sab¹ɿ]さっぱりした, [nab¹ɿ:nab¹ɿ]すべっこい, [ats₁ɿ:ats₁ɿ]暑い

③その他の語例

[g¹ɿ:pa]かんざし, [¹ɿ:sa]唾, [k¹ɿ:ba:]牙, 八重歯, [b¹ɿ:]坐る, [b¹ɿ:ku
na¹ɿzu]鯛, [ts₁:b¹ɿ]交尾

1.3.2. 前舌せま母音/i//i:/

/i//i:/は、非円唇の母音である。日本語の/e/に対応してあらわれる。日本語の各行の工段の音節と平良方言との対応はつぎのとおりである。

- /e/ — /i/ [i:]柄, [kui]声, [mai]前
/ke/ — /ki/ [ki:]毛, [t̚aki]竹, [s̚aki]酒
/ge/ — /gi/ [kagi]影, [p̚ʷgi]髭
/se/ — /si/ [afi]汗, [k̚ʲʲi:]煙管, [miʲiru]見せろ
/ze/ — /zi/ [kadzi]風, [d̚ʲʲi:]錢, [d̚ʲʲi:]膳
/te/ — /ti/ [ti:]手, [tigami]手紙, [ti:]天
/de/ — /di/ [udi]腕, [sudi]袖
/ne/ — /ni/ [ni:]根, [pupi]骨, [fpi]船, [upupi]大根
/he/ — /pi/ [pi:]屁, [pira]へら
/be/ — /bi/ [nabi]鍋, [jubi]昨夜
/me/ — /mi/ [mi:]目, [mami]豆, [jumi]嫁, [ts̚imi]爪
/re/ — /ri/ [arari]穢

日本語の/i/に対応するのは、基本的には舌先母音/i/であるが、/i/にならず、/i/のままあらわれるばあいもある。とくに、語頭にあらわれる/mi//ni//i/は、平良方言でも/mi//ni//i/であられる。

- /ni/ — /ni/ [ni:]荷、二
/n/ [kan]蟹, [uŋ]鬼, [d̚ʲʲi:]錢
/mi/ — /mi/ [mi:ts̚i]三つ, [mim̚]耳, [midz̚i]水
/m/ [mim̚]耳, [kam̚]神, [m̚ts̚i]道, [m̚ts̚u]味噌
/i/ — /i/ [iŋ]犬, [ift̚s̚i]いくつ, [its̚i]いつ
/ɿ/ [ʷi:]飯, [maɿ]米 (マイ), [ʷizu]魚 (いをに対応か)

「木」「起きる」の[k̚i]が[k̚ɿ]とならず [ki]となる。上代特殊仮名遣いの乙類の「き」が琉球方言で甲類の「き」とちがった変化をすることがある。日本語の/ki/に対応する平良方言の音節は/k̚ɿ/であり、/ke/に対応するのは/ki/である。しかし、/ki:/ (木)、/uk̚iɿ/ (起きる) は、その例外となるものであり、この単語は他の琉球方言でも同様な形であられる。ただし、乙類の

「キ」がすべてこのようにあらわれるわけでもなく、また、上代特殊仮名遣いの甲乙の区別が平良方言をはじめとする宮古諸方言で完全にたもたれているというわけでもないようである。

/i/には、無声化したアロフォン[j̥]がある。無声化した[j̥]は、無声子音にはさまれたときにあらわれるほか、語末でもあらわれる。語末での無声化は無声子音にはさまれたときのように義務的ではない。

[k̥i̥ta]桁, [k̥i̥si̥]煙管, [p̥i̥ta]下手, [p̥i̥si̥]干瀬, [ʃ̥ki̥ki̥]世間, [p̥i̥ʃ̥i̥sa]寒さ, [aʃ̥i̥]汗

後続する音節が/si/[ʃi]のばあい、無声化する/i/[j̥]のアロフォンとして[ʃ]があらわれることがある。この[ʃ]は、音節主音として機能している。

/kisi/[k̥i̥si̥]~[k̥ʃ̥i̥]切って(動詞の第二なかどめ)

/pisisa/[p̥i̥ʃ̥i̥sa]~[p̥ʃ̥i̥sa]寒さ

同様に、先行する子音が有声音のとき、あるいは後続する子音が摩擦音[ʃ]のとき、/i/のアロフォンとして摩擦音[ʃ]があらわれることがある。これも[ʃ]が音節主音として機能しているようにみえる。

/bizi/[b̥i̥zi̥]~[bi̥zi̥]~ [b̥ʃ̥i̥]座れ(動詞の命令形)

/izi/[i̥zi̥]~[i̥ʃ̥i̥]~ [ʃ̥i̥]入れて(動詞の第二なかどめ)

語頭におけるつよい呼気によって、[i]の前舌面がさらに前におしやられて[i̥](=[̥i])が発生し、[i̥]の進行同化によって後続の子音を摩擦音化させたのちに、こんどは後続する子音の逆行同化によって[ʃ̥][ʃ̥]になり、さらに、前舌せま母音/i/に変化させたと考えられる。空気力学的条件がつよくはたらいた同化といえるだろう。

*ire → ʔri → ʔzi → ʃzi → ʃi

なが母音/i:/はつぎのようなばあいにあらわれる。

(1) 日本語の1音節語に対応して。

[ti:]手, [ki:]毛, [pi:]屁, [ni:]根・子(十二支), [mi:]目・巳(十二支)

(2) 語幹末が/i/でおわる形容詞の重複形の前半の語幹末にあらわれる。

[p̥i̥ʃ̥i̥:p̥i̥ʃ̥i̥]寒い, [imi:imi]小さい, [puri:puri]馬鹿な

(3) 日本語の工段長音に対応して。

- [ʃiŋʃi:]先生、[ʃi:tu]生徒、[ki:satsɿ]警察、[ki:ʃi:tsɿ]啓蟄、[tyki:]時計
- (4) その他の語例
- [pʰi:ti:tsɿ]一つ、[mi:tsɿ]三つ

1.3.3. まえ舌半せま母音

前述したように日本語の/e/に対応する平良方言の母音は/i/なので、/e/の例は見つかっていない。/e:/もつぎの単語にあらわれるだけである。

- (1) 語幹末が/i/でおわる形容詞の程度強調をうけた重複形にあらわれる。

[piʃe:piʃi]寒い、[ime:imi]小さい

- (2) その他の語例

[gude:gukku]鶏の鳴き声(擬声語)

1.3.4. ひろ母音/a//a:/

/a//a:/の調音は、日本語のそれとほぼおなじである。平良方言の/a/は、語頭の音節で無声子音にはさまれとき、/a/であらわれる。/a/の無声化は、せま母音の無声化にくらべて義務的ではなく、無声化しないこともおおい。

/a/は、日本語の/a/に対応してあらわれる。日本語の各行のア段の音節と平良方言の音節との対応は、以下のとおりである。

/a/ — /a/ [atsa]明日、[aka:aka]赤い、[ami]雨、[atu]跡

/ka/ — /ka/ [kaʃa]笠、[kaʃa]肩、[tsɿka]柄

/ga/ — /ga/ [kagaŋ]鏡、[gakʰi]餓鬼(食いしん坊)

/sa/ — /sa/ [saʃa]砂糖、[saʃi]酒、[sara]皿、[saɿ]申(十二支)

/za/ — /za/ [kadzaʃmu]風下、[tʃu:dzara]中皿

/ta/ — /ta/ [taʃa]鷹、[taʃu]蛸、[fta]蓋、[kaʃa]肩

/da/ — /da/ [fda]札、[padaka]裸、[dami]駄目、[pʰidaɿ]左

/na/ — /na/ [nada]涙、[natsɿ]夏、[pana]花・鼻、[tsɿna]網

/ha/ — /pa/ [pana]花、鼻、[paʃa]墓、[paʃaŋ]鉄

/ba/ — /ba/ [baso:]芭蕉、[bafa]馬車

/ma/ — /ma/[mata]股、[mami]豆、[ʃma]島、[matsɿgi:]松

/ra/ — /ra/ [sara]皿、[bara]薬、[mura]村、[tura]寅(十二支)

/wa/ — /ba/ [bara]薬、[bakamunu]若者、[tʃabaŋ]茶碗

/a:/はつぎのようなばあいにあられる。

- (1) 日本語の1音節語に対応して。

[ta:]田、[na:]名、[pa:]歯、[dza:]座、[tʃa:]茶

- (2) 語幹末に母音/a/があらわれる形容詞の重複形のなかに。

[aka:aka]赤い、[taka:taka]高い、[baka:baka]若い、[japa:japa]

柔らかい、[ayva:ayva]脂っこい、[ikjara:ikjara]少ない

- (3) /-awa/のような音声連続の/w/が脱落して、/-a:/であられる。

[na:]縄、[ka:]皮、[a:]粟、[ukʰina:]沖縄、[ta:ra]俵

- (4) 日本語の八行四段動詞に対応する平良方言の動詞のうち、代表形(いわゆる終止形)の語尾に母音/o:/を含む動詞の「さそいかける形」の語尾

[ka:]買おう([ko:]買う)、[ara:]洗おう([aro:]洗う)、

[fa:]食おう([fo:]食う)、[idja:]出会おう([idjo:]出会う)

- (5) 同じく上記の動詞の否定の形の語尾に。(これは(3)の現象とも重なる)

[ka:n]買わない([ko:]買う)、[ara:n]洗わない([aro:]洗う)、

[fa:n]食わない([fo:]食う)、[pa:n]這わない([po:]這う)

- (6) 母音/a/でおわる名詞にとりたての助詞[-ja]のついたかたち

[pana:]鼻は([pana]鼻)、[bata:]腹は([bata]腹)、

[sana:]傘は([sana]傘)、[ɲnama:]今は([ɲnama]今)

- (7) 母音/i/でおわる名詞にとりたての助詞[-ja]のついたかたち

[paɲa:]羽は([paɲi]羽)、[sakja:]酒は([saki]酒)、

[amja:]雨は([ami]雨)、[jarabja:]子供は([jarabi]子供)

- (8) その他

[ʃa:ka]早朝、[ma:ma]継母、[pja:pja:]早い、[pkja:n]昔、[ja:tsɿ]八つ

1.3.5. 奥舌半せま母音/o//o:/

/o//o:/は、円唇の奥舌半せま母音である。日本語の/o/に対応する平良方言の母音は/u/なので、みじか母音の/o/は、原則としてみられない。また、

なが母音/o:/は、つぎのようなばあいにあられる。

- (1) 二重母音/ao//au/が融合してなが母音/o:/があらわれる。

[o:]膏, [so:]竿, [to:s]倒す, [no:s]直す, [bo:]棒, [ko:]線香

- (2) 古代日本語（以下単に古代語）八行四段動詞の語幹末が/a/になる動詞の終止形語尾にあられる。

[ko:]買う, [aro:]洗う, [bako:]奪う, [po:]這う, [fo:]食べる(食らう)

- (3) みじか母音/u/でおわる名詞のとりたて[-ja]のかたち

[buto:]夫は([butu]夫), [muko:]婿は([muku]婿)、

[nuno:]布は([nunu]布), [pako:]箱は([paku]箱)

- (4) みじか母音/a/でおわる名詞の対格[-ju]のかたち

[sato:]砂糖を([sata]砂糖), [nmo:]祖母を([nma]祖母)、

[bubo:]伯母を([buba]伯母), [pano:]花を([pana]花)

- (5) 語幹末が/u/でおわる形容詞の重複形の程度強調をうけたかたち

[upo:upu]大きい, [ffo:ffu]黒い, [sso:ssu]白い, [p¹so:p¹su]広い

- (6) その他の語例

[po:k¹]箒, [bo:]童名(王「ワウ」に対応), [to:]誰, [ko:ko:]貧しい、

[do:dzi:do:dzi]上手, [go:ra]苦瓜, [mo:ki]儲け, [pudzo:]煙草入れ、

[so:ki]箒, [no:]何, [jo:jo:]弱い, [o:]喧嘩, [o:g¹]扇, [to:f]豆腐

1.3.6. 奥舌せま母音/u//u:/

/u/[u]の典型的なアロフォンは上下の唇をつきだすように丸めた母音である。とくに、/su/[su], /cu/[tsu], /zu/[dzu]などの舌先の摩擦音、破擦音と奥舌せま母音/u/が結合するばあい、唇での丸めは顕著である。

平良方言の/u/は日本語の母音/o/および/u/に対応してあらわれる。ただし、日本語のウ段に対応する音節のばあい、先行する子音の条件によって、母音/u/が脱落して成節的な子音になったり、/ɨ/に変化したりしている。

/u/には無声化したアロフォン[ɸ]がある。無声化した[ɸ]は無声子音にはさまれたときにあらわれるほか、語末でもあらわれる。ただし、語末での無声化は義務的ではないようである。

(1) 日本語の各行のオ段の音節と平良方言の音節の対応はつぎのとおりである。

- /o/ — /u/ [uja]親、[uŋ]鬼、
/ko/ — /ku/ [kumi]米、[kui]声、[muku]婿
/so/ — /su/ [suku]底、[sudi]袖、[ɱtsu]味噌、[fsu]糞
/zo/ — /zu/ [ɱdzu]溝、[kudzu]去年（こぞ）
/to/ — /tu/ [tu₁]鳥、[butɯtu₁]おととい、[tuna₁]隣、
/do/ — /du/ [duru]泥、[duku]毒、[budu₁]踊り、[kadu]角
/no/ — /nu/ [nunu]布、[tsɪnu]角、[bu:nu]斧
/ho/ — /pu/ [puɲi]骨、[pu:]帆・穂、[upuɲi]大根
/mo/ — /mu/ [mu:]藻、[mumu]腿、[k^hɪmu]肝
/jo/ — /ju/ [ju₁]夜、[jumi]嫁、[juku]横
/ro/ — /ru/ [iru]色、[fkuru]袋、[duru]泥
/wo/ — /bu/ [butɯtu₁]一昨日、[budu₁]踊り、[butu]夫

(2) 日本語の各行のウ段の音節と平良方言の音節の対応はつぎのとおりである。

- /u/ — /u/ [uʂ]牛、[udi]腕
/mu/ — /mu/ [muku]婿、[muʂ]虫
/ju/ — /ju/ [ju:]湯、[juɱ]弓、[maju]眉
/nu/ — /nu/ [nunu]布、[nuʂtu]盗人

日本語の/su//cu//zu/および/ru/、すなわち、舌尖音と母音/u/とが結合した音節に対応する平良方言の音節の母音は/u/ではなく、/ɪ /に変化しているか、あるいは/ɪ/からさらに変化して母音を消失させている。

- /su/ — /s/ [ʂsɪ]巢、[uʂ]臼
/cu/ — /cɪ/ [tsɪnu]つの、[tsɪna]綱、[tsɪmi]爪、[tɬtsɪ]辰
/zu/ — /zɪ/ [midzɪ]水、[kidzɪ]傷
/ru/ — /ɪ/ [ju₁]夜、[saɪ]申（十二支）

日本語の/ku//hu//gu//bu/に対応する平良方言の音節は*ku・*pu>*fu>f、*gu・*bu>*vu>vのように/u/を脱落させ成節的な子音に変化している。

- /ku/ — /f/ [fmu]雲、[fsa]草、[maffa]枕
/gu/ — /v/ [do:v]道具

/hu/ — /f/ [fni]船, [fta]蓋, [to:f]豆腐

/bu/ — /v/ [avva]油, [pau]蛇 (「ハブ」に対応か)

単独で語中にあらわれる日本語の母音/o/ /u/に対応する平良方言のばあい、先行する母音と融合するので、語中に単独の/u/があらわれることはない。なが母音/u:/は、つぎのようなばあいにあられる。

- ① 日本語の1音節語に対応して。

[pu:]帆, 穂, [nu:]野, [mu:]藻, [ku:]粉, [ju:]湯

- ② 語幹末の母音が/u/になる形容詞の重複形の程度強調をうけない形。程度強調をうけると、前半の語幹末の母音が/o:/になることがある。

[upu:upu]大きい, [ma:ku:ma:ku:]丸い, [p^hisu:p^hisu]広い, [ffu:ffu]黒い, [ssu:ssu]白い

- ③ 古代語のehu, oho, ohu, owoなどが融合して。

[kju:]今日, [bju:]酔う, [mju:tu]夫婦, [k^hnu:]昨日, [tu:]十

- ④ 母音/u/でおわる名詞の対格のかたち

[mumu:]腿を ([mumu]腿), [butu:]夫を ([butu]夫), [duru:]泥を ([duru]泥)

- ⑤ 母音/i/でおわる名詞の対格のかたち

[jumju:]嫁を ([jumi]嫁), [puju:]骨を ([puji]骨)

- ⑥ 古代語八行四段動詞で語幹末の母音がuでおわるタイプの動詞

[ku:]乞う, [nu:]縫う, [juku:]休む, [umu:]思う

- ⑦ その他の語例

[bu:g^hi]砂糖黍, [du:]胴, [ku:muja]ゴキブリ, [gu:]仲間, [su:]潮, [dzu:]さあ(よびかけ), [tsu:tsu:]強い, [nu:ma]馬, [u:du]布団

1.3.7. 二重母音について

奄美沖繩方言群において/ai//ae//ue/などの二重母音が融合するのところが、平良方言では融合せず、つぎのような二重母音のみられる^(注10)。

	前	蠅	上
平良方言	[mai]	[pa ² ɿ]	[ui]
首里方言	[me:]	[ʔe:]	[ʔwi:]
名瀬方言	[më:]	[ʔë:]	[ʔwi:]

平良方言の二重母音は、つねに前にくる母音がひろい母音で、後にくる母音がせまい母音である。

/ai/ [aimunu]あえ物、[mai]前、[pai]南、[kai]彼、[kaina]腕、[-mai]-も(係助辞)、[nai]地震、[fai]食え、[kai]買え、[kaiba]買えば

/aɿ/ [ma²ɿ]米、[pa²ɿ]蠅、[utugaɿ]顎、[ʃʃaɿ]白蟻、[karapaɿ]灰、[agaɿ]東、[bunaɿ]姉妹、[sagaɿ]下がる、[tamaɿ]溜まる

/ui/ [ui]上、[uip²ɿtu]老人、[muidzo:ki]箕、[kui]声、[mubui]首、[ubuiru]覚えろ、[kuiru]越えろ

/uɿ/ [muɿ]森、[ʃnuɿ]モズク(海草)、[tuɿ]鶏、[juɿ]夜、[nuɿ]糊、[miduɿ]木の芽、[fuɿmabo:]車棒、[tuɿ]取る、[muɿ]盛る

/iɿ/ [i²ɿ]西、[i²ɿ]錐、[nubiɿ]野蒜、[miɿ] (魚などの)身、[i²ɿk²ɿ]鱗
[piɿ]ニンニク、[piɿ]針、[ukiɿ]起きる、[tatiɿ]立てる

1.4. 子音フォネーム

平良方言の子音を、(1) 調音の方法、(2) 調音の位置、(3) 声門の状態、(4) 口蓋音化と唇音化の有無、のよっつの基準にしたがって分類することができる。平良方言の子音は、調音の方法によって、破裂音、破擦音、摩擦音、鼻音、流音、半母音にわかれる。破裂音、破擦音、摩擦音は、さまたげ音 (obstruents) であり、鼻音、流音、半母音は、ひびき音 (sonants) である。調音の位置でみると、両唇音、唇歯音、前舌音、奥舌音、声門音がある。調音の位置に唇歯音 (上の前歯と下唇の摩擦音) があるのは、平良方言の特徴である。

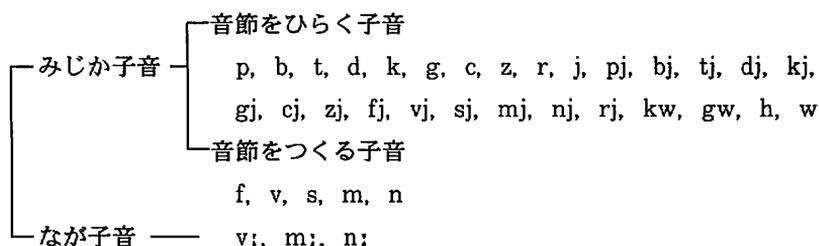
10 城辺町保良、新城、池間島などの方言では、二重母音/au//ao/なども融合せず、二重母音のまま保存されている。

			両唇音	唇 齒	前舌音	奥舌音	声門音
さまざまげ音	破裂音	無声音	p pj		t tj	k kj(kw)	
		有声音	b bj		d dj	g gj(gw)	
	摩擦音	無声音			c cj		
		有声音			z zj		
	摩擦音	無声音		f fj	s sj		(h)
		有声音		v vj			
ひびき音	鼻 音	有声音	m mj		n nj		
	流 音	有声音			r rj		
	半母音	有声音	(w)		j		

() 内は、語例の少ない、周辺のフォネムである。

声門の状態（声門における振動の有無）によって、子音は、有声音と無声音にわかれるが、平良方言のばあい、さまざまげ音は無声音と有声音の対をもっているが、ひびき音はすべて有声音である。奄美沖縄方言群の多くの方言にみられる喉頭/非喉頭の対立がみられないのも平良方言の特徴のひとつであろう。

単語内での位置や音節形成への参加のしかたという観点から平良方言の子音を以下のように分類することができる。



平良方言の子音は、みじか子音となが子音にわかれる。

m ma	祖母	nka ₁	向かい
m :ma	芋は	n:ka ₁	似ている

なが子音は、うえの例のように単独で音節を形成し、単語をあらわすことができる。子音に長短の区別のあることを平良方言の音声的な特徴のひとつとし

てあげることができるだろう。

みじか子音には音節をひらく子音と音節をつくる子音の2種類がある。音節をひらく子音は、音節をひらく位置(①)にしかくることができないものである。音節をつくる子音は、単独で音節を形成するばあい、②語頭、③語中、④語尾のいずれの位置にもくることができる。また、音節をひらく子音は、開音節の音節をひらく位置(①)にもくることができる。

①[pa:]歯	[du:]胴	[mi:]目
②[m̥ta]土	[ɥda]太い	[ŋkɪ]神酒
③[akaŋta]赤土	[kiɥʂ]煙	[akaŋga]赤ん坊
④[kam]神	[kuɥ]昆布	[kan]蟹

1.4.1. みじか子音

1.4.1.1. 音節をひらく子音

音節をひらく子音は、口蓋音化を特徴とする子音(拗音節をつくる子音)、唇音化を特徴とする子音(合拗音節をつくる子音)、口蓋音化も唇音化も特徴としない子音(直音節をつくる子音)のみ3つのグループにわけることができる。音節をひらく子音は、つねに母音とむすびつき、音節をひらく位置にくる。

口蓋音化も唇音化も特徴としない子音

/p, b, t, d, k, g, c, z, r, (h) /

口蓋音化を特徴とする子音

/pj, bj, tj, dj, kj, gj, cj, zj, fj, vj, sj, mj, nj, rj, j/

唇音化を特徴とする子音

/ (w, kw, gw) /

口蓋音化を特徴とする子音には、破裂音(pj, bj, tj, dj, kj, gj)、破擦音(cj, zj)、摩擦音(fj, vj, sj)、鼻音(mj, nj)、流音(rj)、半母音(j)の調音方法がそろっているが、口蓋音化も唇音化も特徴としない子音には、破裂音(p, b, t, d, k, g)、破擦音(c, z)、流音(r)、摩擦音(h)があるが、鼻音などが欠けている。この欠けている鼻音(m, n)や摩擦音(f, v, s)は、音節をつくる子音である。唇音化を特徴とする子音は、いずれも語例がすくな

く、周辺のなフォネームである。

1.4.1.2. 音節をつくる子音

音節をつくる子音/m//n//s//f//v/は、口蓋音化も唇音化も特徴としない子音である。/m//n/は鼻音で、ひびき音のグループに属するが、/s//f//v/は摩擦音で、さまたげ音のグループに属する。音節をひらく子音の共通の特徴は、継続音だということだろう。継続音であることが子音としての独立性、すなわち、単独で音節を形成できる能力を保証しているのであろう。

音節形成能力からみると、音節をつくる子音の摩擦音と鼻音は、音節をひらく子音（破裂音、破擦音、流音）にくらべて、多様な音節形成の仕方をする。

$C_1 \ C_2 \ V_1 \ C_3$

摩擦音と鼻音は、うえにしめした、 $C_1 \cdot C_2 \cdot V_1 \cdot C_3$ のいずれの位置にもたつことができる。 C_1 は、母音と結合することなく、語頭にきて、子音単独で音節を形成するばあいである。 C_1 の位置にくる音節をつくる子音が単独で単語をあらわすことはなく、つねに子音が後続する。このとき、子音 C_1 は単独で1モーラにかぞえられる。

①[ʃsam]しらみ	[ffuka ₁]黒い	[yva]おまえ
[ɾmma]祖母	[ɾnuts ₁]命	
②[ʃda]舌	[f ₁ sa]草	[janav ₁ ts ₁]悪口
[ʃta]下	[fmu]雲	[vdaka ₁]太い
[ɾmta]土	[ŋg ₁]棘	

①のようにおなじ子音が連続するばあい、これまでは摩擦音が連続するとつまる音/Q/に、鼻音が連続するとはねる音/N/として解釈されることがあった。

②のように調音方法あるいは、調音点がことなる子音が後続するとき、鼻音のばあいには①とおなじようにはねる音として解釈するが、摩擦音のばあい、/s/であれば/i/をおぎない、/f/であれば/u/をおぎなって解釈された。そのとき、後続する子音が無声子音であれば、/s₁/[s₁ɨ]、/f₁/[f₁ɨ]のように無声化した母音があるとみなされていた。

まず、[f₁sa]についてみてみる。[f₁sa]において[f]と[sa]のあいだに宮古方言

に特徴的な円唇の母音[u]は観察されない。すなわち、C₁ からC₂にかけての部分に母音/u/は観察されない。

[fmu]において、[f]と[mu]との間にも母音/u/は観察されない。すなわち、C₁ から C₂にかけての部分にも、/ffu - /のC₁から C₂にかけての部分と同様に円唇の母音/u/は観察されない。C₂が/m/などのような有声音であるばあい、C₁部の/f/からC₂部に連続する部分において、そのC₁の/f/の持続部の後半に有声音のひびきがきかれることがある。しかし、それは円唇母音の/u/があるのではなく、そこには依然として、下唇の裏側と上歯とのあいだでせばめが形成されている。下唇の内側が上歯へのかるい接触による摩擦音[f]から、[m]における両唇の閉鎖による鼻腔での共鳴にいたるまで平良方言の[u]に特徴的にみられる両唇をつきだした円唇の母音の発声のための動きはみとめられず、下唇と上歯とを調音点とする半母音[m̥]のような発音が観察され、これは/u/のアロフォンではなく、/f/から/m/へうつっていくときのわたり音なのであろう。C₁部分をつまる音/Q/と解釈する研究者もいることから、C₁からC₂にかけて母音/ɨ/や/u/が実際に発音されていないことがわかる。たとえば、[ffuka₁]「黒い」のC₁からC₂にかけての部分には宮古方言の母音/u/に特有な唇の丸めがほとんどみられず、唇の内側の部分が下歯に接触したままの状態にC₂へ連続して行って、C₂からつぎのV₁部分においてはじめて唇の内側と下歯の接触が解かれ、唇のまるめをともなった母音/u/が発音されるのである。このC₂V₁部の/fu/に典型的にみられるような円唇の奥舌母音/u/はC₁からC₂にかけての部分には観察されない。[fkuru]袋のばあいも同様である。

C₂は母音とつよい結びつきをなし、音節をひらく位置にきて1個の音節を形成し、みじか母音と結合したときにはその音節が1モーラにかぞえられ、なが母音と結合したときにはその音節が2モーラにかぞえられるような子音である。C₁やC₂が子音それだけで1モーラにかぞえられるのに対して、このC₂は、子音そのみではモーラにかぞえることができない。つまる音、はねる音のぞく日本語の子音がこのような子音である。音節主音であるV₁に対して、C₂は音節副音といわれる。

③[so:]竿 [fa:]子 [va:]豚

④[sʌta]砂糖 [ffukaɪ] [yva]おまえ

C₃は、語末にくる子音で、その子音のみで1モーラにかぞえられる。平良方言のばあい、C₃の位置にくることのできる成節的な子音には、鼻音[m][ŋ]、摩擦音[f][v][s]がある¹¹⁾。

⑤[im]海 [mim]耳

[in]犬 [kan]蟹

[af]蒸菓子の名 [kif]蒸気

[av]炙る [pav]蛇

[is]石 [pus]星

おおくの研究者もC₃の位置にくる鼻音[m][ŋ]、有声の摩擦音[v]を成節的な子音とみとめるが、無声の摩擦音[f][s]がC₃の位置にくるばあいは、母音をおぎなって解釈することがある。これはC₁のばあいと同様に、語末の母音が無声化している ([f_y][s_ɪ]) とかんがえるのである。

たしかに、せま母音/u//i/の語末での無声化は義務的ではなく、無声化しないこともある。C₁の成節的な子音/f//s/に有声子音が後続するときのように、語末に/f//s/がくるときも、子音のでわりに声帯の振動が観察されるが必ずしも義務的ではなく、C₁のばあいの成節的なばあいと同様に、語末の[f]のあとに、母音音/u/の調音に特徴的な唇のまるめはみられない。この声帯の振動は、母音を発音するために積極的になされるものとはみなせないのである。C₃に成節的な子音がくる名詞は、対格の格助辞-ju (日本語の「を」に対応)、あるいは、とりたての係助辞-ja (日本語の「は」に対応) を後続させた文法的な形は語末の子音をかさねるという特徴をもっている。これはC₃の位置に

11 成節的な子音として[m][ŋ]を認める研究者の多くは、音節をひらく位置にくる[m]と別のフォネームの子音(成拍的な子音、あるいはモーラ音楽)とらえている。これは日本語や多くの日本語諸方言の撥音/N/と同類のものとみなしている。しかし、撥音/N/のアロフォンが後続の子音によって決定され、そのアロフォンの違いが意味の弁別に役立っていないのとは異なり、平良方言の[m]や[v]などは後続の子音の違いに影響をうけることなく実現するし、その音色の違いが意味の弁別にかかわっているため、日本語の撥音のように鼻音/m//n/と別のフォネームとみなすのではなく、/m//n/のアロフォンとするべきだと考える。[f][v][s]についても同様である。多良間島方言や伊良部島佐和田方言の[l]も同様である。

たつ鼻音/m//n/のばあいも同様であり、成節的な子音を語末にもつ名詞に共通の特徴である。後接する/j/を m, n, f, v, s に変化させるのは、名詞末尾の成節的な子音による進行同化である^(注12)。

⑥/num/蚤	/nummu/蚤を	/numma/蚤は
/kan/蟹	/kannu/蟹を	/kanna/蟹は
/jaf/厄	/jaffu/厄を	/jaffa/厄は
/pas/橋	/passu/橋を	/passa/橋は
/pav/蛇	/pavvu/蛇を	/pavva/蛇は
/fsu/糞	/fsu:/糞を	/fso:/糞は
/ffi/ (烏賊の) 墨	/ffju:/墨を	/ffja:/墨は

子音がV₁の位置にくる例としては、つぎのふたつの語例がある。

⑦[m̥ttsa]道は [fttsa]鯨

[m̥ttsa]も[fttsa]も、[attsa] (下駄) が[at][tsa]のふたつの音節にわかれるのと同様に、[m̥t][tsa]、[ft][tsa]のようにふたつにわけることができる。このとき、成節的な子音[m̥][f]は、[attsa]の[a]と同様に、音節主音として音節形成に参加しているのである。この音節は、2モーラの閉音節である。

[m̥t]の発音において、[m̥]の口むろと鼻むろでの共鳴のあいだ、当然のことながら、唇はとじられたままである。その唇をとじた状態で[t]に移行するが、そのときも唇はとじられたままである。それにつづいて[tsa]が発音されるのである。[fttsa]の発音における、[ft]の発音も同様である。[f]の上歯と下唇のかるい接触があつて（そのとき前舌による閉鎖はないようである）、つよい呼気による摩擦音があり、前舌による閉鎖[t]がつづくが、そのあいだも上歯と下唇の接触は積極的には解消されずのこっている。[m̥][f]は、[attsa]の発音における音節[at]の音節主音(V₁)の役割をはたしている母音/a/と同様に、音節主音(V₁)としての役割をはたしているのである。

平良方言の[m̥ttsa]の[m̥]、[fttsa]の[f]、多良間島方言の[b̥|:b̥|:gassa] (くわず芋) のそり舌の側面摩擦音[|:]が音節主音となるなど、宮古諸方言のなか

12 成節的な子音として/f/をみとめず、/jafu/と解釈し、/u/をみとめると、この同化現象の説明はむづかしくなる。

には、半子音とよぶべき子音があって、半子音の生成のプロセスをかんがえる
うえて、興味ぶかい。音節主音になることのできる/s//m//f//l/を半子音と
みなすなら、宮古諸方言では、鼻音/m/、流音/l/はもちろんのこと、摩擦音/
s//f/も、ひびき音とみなすことができるだろう。

1.4.2. 破裂音/p, b, t, d, k, g/

平良方言の破裂音は無声破裂音の/p, t, k/と有声破裂音/b, d, g/の6個
である。無声破裂音は、語頭において[pʰ][tʰ][kʰ]のように表記したくなるほど、
母音へのでわたり際に際しての呼気がつよい。有声破裂音/b, d, g/は、和語に
おいては擬声擬態語をのぞくと、原則として、語頭にくることがないが、平良
方言においては、語頭にもあらわれる。有声破裂音が語頭にくる単語は、日本
語との対応（あるいは語源）が不明のものがおおい。

1.4.2.1. 両唇破裂音/p, b/

(1) 無声の両唇破裂音/p/

/p/は、日本語の八行子音/h/に対応してあらわれるが、これは、古代語で
は八行の子音が*pであったと推定されているので、その*pが保存されていると
みるべきもので、日本語のふるい姿をのこしている。

/ha/	—	/pa/	[pana]花、鼻、[paka]墓、[pama]浜
/hi/	—	/pɪ/	[pʰɪgi]髭、[pʰɪdaɪ]左、[pʰɪtu]人
/hu/	—	/f/ ^(註13)	[fni]船、[fta:tsɪ]二つ
/he/	—	/pi/	[pi:]屁、[pira]へら、[pidzɪ]肘
/ho/	—	/pu/	[puɲi]骨、[pu:]帆、穂

古代語の語中の八行子音/p/は、「八行転呼音」とよばれる音韻変化によっ
て、/w/をへて消失しているが、他の宮古諸方言のばあいと同様に、語中の

13 奥舌のせま母音/u/と結合する/p/が摩擦音/f/になるのは、上村(1989)のいう「おしひろ
げ」現象による音韻変化であって、つよい呼気によって唇がおしひろげられた結果、破裂音
/p/が摩擦音/f/に変化したのであろう。[摩擦音/f/の項参照。]

/p/は消失するのが原則だが、/p/を保存するばあいがある。

[japa:japa]柔らかい、[kupa:kupa]堅い(古語「こはし」に対応)、[apa:apa]味が薄い(「あはし」に対応)、[o:pa]青菜、[katapa]不具者(片端[カタハ]に対応)、[upu:upu]大きい(古語「おほし」に対応)

日本語との対応では/b/であられるはずだが、つぎの2語は、/p/があらわれている。いずれも/p/に先行するのは、無声の成節的な子音[s̥]である。この[s̥]の影響によって後続する[b]が無声子音化したのであろう。

[asp̥ʰ]遊ぶ、 [nas̥p̥ʰ]なすび

その他の語例

/pɪ/ [pʰɪga:]比嘉(地名)、[pʰɪgurukaɪ]冷たい、[pʰɪkaɪ]光、[pʰɪsara]平良(地名)、[pʰɪsuma]昼間

/pi/ [piɪ]針、[pinda]山羊、[aspi]遊ぶ、[piʃi:piʃi]寒い、[piʃi]干瀬、[piʃta]下手

/pa/ [panata]崖、[paɪ]羽、[aspa]遊ぶ、[paʃam]はさみ、[paʃu]鳩

/pu/ [puɳdai]わがまま、[puɪ]掘る、[m:purja]芋掘具、[puka]外、[puki]埃

/pi:/ [pi:]屁、[pi:ttʃa]少し、[pi:gama]笛

/pa:/ [pa:gatsɪ]海綿、[pa:]祖母、[japa:japa]柔らかい、[kupa:kupa]堅い

/po:/ [po:]這う、[po:tʃa:]料理人(包丁)、[po:kʰɪ]箒、[gumpo:]牛蒡

/pu:/ [pu:ro:mami]さや豆、[upu:upu]大きい

(2) 有声の両唇破裂音/b/

両唇の有声破裂音/b/は、日本語の/b/に対応してあらわれるほか、古代語のワ行子音/w/に対応してあらわれる。

/ba/ — /ba/[basa]芭蕉、[baʃa]馬車、

/bi/ — /bɪ/[dabʰɪ]茶毘(葬式)、[ibʰɪ]伊勢海老

/bu/ — /v/ [ayva]油、[kuy]昆布(こぶ)^(註14)

/be/ — /bi/[nabi]鍋、[junabi]夜なべ

/bo/ — /bu/[tsɪbu]壺

14 奥舌せま母音/u/と結合した/bu/は、成節的な子音/v/[v]に変化している。これは*pu→fの音韻変化とパラレルに起きた音韻変化であろう。[摩擦音/v/の項参照。]

また、古代語のワ行の子音/w/が/b/に変化している。これは、つよい呼気が原因でおきた変化で、他の宮古諸方言、あるいは八重山諸方言、与那国方言、すなわち、宮古八重山方言群に共通にみられる現象である。

/wa/ — /ba/[bara]蕨、[bana]罌、[baɪ]割る

/wi/ — /bɪ/[bʰɪ:]亥(十二支)、[bʰɪzi]坐れ(命令形)

/we/ — /bi/[bju:ɪ]酔う、[biguɪ]えぐる

/wo/ — /bu/[buba]叔母、[butu]夫、[bu:nu]斧

語中のワ行子音/w/は、ほとんどのばあい、消失してしまっている。日本語のばあい「わ」にかぎって語中の/w/を保存しているが、平良方言のばあい、語中の「わ」の/w/も脱落している。母音によっては/w/の前後の母音が融合している。(ただし、語中の「ゑ」に対応する語例は見つかっていない)

あわ(泡) [a:], せわ(心配) [ʃa:], たわら(俵) [ta:ra]

あゐ(藍) [ai], なゐ(地震) [nai],

さを(竿) [so:], あを(膏) [o:]

語頭に/p/のあらわれる単語が複合語の後要素になるとき、有声音化して/p/が/b/に変化する。

/pana/花 → /akabana/ハイビスカス(赤花)

/puni/骨 → /jumbuni/腰骨

/pa:/歯 → /maiba:/前歯

日本語との対応が不明な単語で、語頭に有声破裂音/b/をもつ語がみられる。

[bataf]へそくり、[biygassa]くわずいも(植物)、[babja]鯛の一種、

[baŋkʰɪ]桑の実、[biraf]籠の種類

その他の語例

/bɪ/ [bʰɪda:bʰɪda]低い、[bʰɪgu]蘭草、[kabʰɪ]嗅ぐ、[kabʰɪ]紙、[tabʰɪ]旅、

[jubʰɪ]吸う

/bi/ [bidu]鯛、[bikidum]男、[bigo:bigo:]くすぐつたい、[jarabi]童、[kubi]

壁、[uibi]指

/ba/ [bakʰɪda]腋臭、[bata]腹、[baɪ:baɪ]悪い、[gabafu:]曾祖父、[saba]

草履、[naba]垢

/bu/ [budza]叔父, [buʃ]勇ましい人, [butʃtu₁]一昨日, [nubui]喉
 /bɪ:/ [b'ɪ:]坐る, [b'ɪ:kun'ɪzu]ヒラメ, [nab'ɪ:nab'ɪ]すべっこい
 /bi:/ [bi:ɪ]トンボ, [bi:ŋgu]オオハマボウ(植物)
 /ba:/ [ba:ki]ざる, [ʃiba:ʃiba]狭い
 /bo:/ [bo:]童名の一つ, [bo:ʃi]帽子, [bo:dzi]坊主
 /bu:/ [bu:]麻(ノカラムシ), [bu:g'ɪ]砂糖きび^(註15)

1.4.2.2. 前舌破裂音/t, d/

前舌と硬口蓋とで調音される破裂音には、無声破裂音の/t/と有声破裂音の/d/がある。いずれも前舌面と歯茎から硬口蓋にかけての部分で閉鎖を形成して調音される破裂音である。

(1) 無声の前舌破裂音/t/

/t/と日本語の子音との対応はつぎのとおりである。

/ta/ — /ta/ [ta:]田, [tʰaki]竹, [kʰata]肩

/te/ — /ti/ [ti:]手, [tiŋ]天

/to/ — /tu/ [tu₁]鳥, [tura]寅, [atu]跡

日本語のタ行子音のうち、イ段とウ段の音節の子音は破裂音であらわれる。平良方言も日本語と同様に破擦音であらわれるので、破裂音/t/があらわれるのは、タ行のア段、エ段、オ段の音節においてである。

その他の語例

/ti/ [tiʏ]投げる, [tida]太陽, [tiŋzaku]鳳仙花, [mi'ɪti]三年, [mɪti]六年,
 [mumuti]百年

/ta/ [tavkja:]一人, [tatam]畳, [sʰata]砂糖, [fta]蓋, [mta]土

/tu/ [tunaka]卵, [tugja]棘, [tudzi]妻, [tu₁]鶏, [butʃtu₁]おととい,
 [utʃtu]弟妹

/ti:/[p'ɪti:tsɪ]ひとつ

15 宮古諸方言では、b→g、あるいは、g→bの不規則な変化がみられる。

b→gの例	[fg'ɪ]首, [tsɪguʃ]膝[ツブシ]
g→bの例	[kab'ɪ]嗅ぐ

/ta:/[fta:tsɨ]ふたつ、[fta:i]ふたり、[ʃta:ra]下方

/to:/[to:]誰、[to:yva]台所

/tu:/[tu:]とお、[tu:ti]十年、[tu:tu:]遠い

(2) 有声の前舌破裂音/d/

日本語のダ行子音のうち、イ段とウ段の音節の子音は破擦音であられる。平良方言も日本語と同様に破擦音であられるので、破裂音/d/があらわれるのは、日本語のダ、デ、ドに対応する音節においてである。

/da/ — /da/[daʃ]出汁、[pʰɨdaɨ]左

/de/ — /di/[sudi]袖、[udi]腕

/do/ — /du/[duru]泥、[kadu]角、[duku]毒

語頭で/t/であられる単語が複数語の後要素になるとき、有声音化して有声破裂音/d/になる。

/ta:ra/俵 → /maɨda:ra/米俵

/ti:/ 手 → /katadi:/片手

/tus/ 年 → /aradus/新年

その他の語例

/di/[aɱdira]縄で編んだ籠の一種、[idi]出る

/da/[dajaʃ]棟梁、[dakkjo:]ラッキョウ、[ɱdaɨ]破る、[nada]涙

/du/[duʃ]友人、[duʃkʰɨgi:]デイゴ、[paduɨ]雀、[adu]踵

/di:/[di:ŋgu]梯梧、[kaɱtadi:]片手、

/de:/[gude:gukku]鶏の鳴き声(擬声語)

/da:/[maɨda:ra]米俵、[ʃda:ʃda]涼しい

/do:/[do:dzi]上手、[kado:]角は、[ado:]踵は

/du:/[du:]踵、[kadu:]角を、[adu:]踵を、

1.4.2.3. 軟口蓋破裂音/k//g/

(1) 無声の軟口蓋破裂音/k/

/k/は、日本語のカ行の子音/k/に対応してあられる。

/ka/ — /ka/[kagam]鏡、[kadzi]風、[taɱka]麿

/ki/ — /k₁/[k¹imu]肝, [k¹aŋ]着物, [k¹inu:]昨日
 /ku/ — /f/ [fsa]草, [fsu₁]葉 [ifsa]戦, [fts₁]口, [ifts₁]いくつ
 /ke/ — /ki/[k₁ta]桁, [t₁aki]竹, [s₁aki]酒
 /ko/ — /ku/[kui]声, [muku]婿, [taku]蛸, [tabaku]タバコ
 /ku/ — /f/ [fts₁]口, [fmu]雲, [fš]櫛^(註16)

その他の語例

/k₁/[k¹am]黍, [k¹idaikuni]人参, [k¹š]切る, [k¹pada]服装
 /ki/ [kiyš]煙, [kinai]家庭, [kiŋ]蹴爪, [kidz₁]傷, [k₁f₁i]煙管,
 [k₁ts₁]白子, [k₁f₁i]着せる
 /ka/ [kaja]茅, [kab¹]紙, [karadz₁]髪, [k₁ku]癌, [k₁tsa]蚊帳,
 [k₁sa]笠, [k₁ta]バツタ
 /ku/ [kubašmja]甲イカ, [kuba]クバ, [kubi]壁, [kupa:kupa]堅い,
 [kukunuka]九日
 /k₁:/[k¹₁:ba]牙, 八重歯, [k¹₁:ru]黄色
 /ki:/[ki:f₁ts₁]啓蟄, [ki:u₁]胡瓜
 /ka:/[ka:ma]むこう, [ka:tu₁]蝙蝠, [ka:ra]瓦, [ka:gi]容貌,
 [ka:f₁nata]ヒキガエル
 /ko:/[ko:ko:]貧しい, [ko:ko:]痒い, [ko:dz₁]鞠, [ko:š]菓子, [tako:]蛸は
 /ku:/[ku:]来い, [ku:muja:]ゴキブリ, [ku:ru:]独楽, [taku:]蛸を

(2) 有声音の軟口蓋破裂音/g/

平良方言の/g/は、日本語のガ行の子音/g/に対応してあらわれる。

/ga/ — /ga/[kagam]鏡, [pagama]釜

16 日本語の/ku/に対応するのは、成節的な子音の[f]である。これは宮古諸方言、あるいは波照間島方言などのいくつかの八重山諸方言に共通にみられるものである。/ku/は軟口蓋に調音点をもつ破裂音/k/と唇のまるめを特徴とする奥舌母音/u/とがむすびついた音節であるが、このときの声道の形は、唇を調音点とする子音/p/と奥舌せま母音/u/が結合した音節/pu/の形に近似していて、/pu/→/f/と同様に、つよい呼気によって軟口蓋での閉鎖が「おしひろげ」られ、そのつよい呼気を唇と下歯とでの「ふんばり」で[f]になったものであろう。[摩擦音/f/の項参照。]

/gi/ — /gɿ/[ŋgʷɿ]右, [fgʷɿ]釘, [mugʷɿ]麦
 /gu/ — /v/ [do:v]道具
 /ge/ — /gi/ [pʷɿgi]髭, [kagi]影, [pagi]禿げ
 /go/ — /gu/[guma]胡麻, [gumpo:]ゴボウ^(註17)

無声破裂音/k/ではじまる単語が複合語の後要素になったとき、有声音化して有聲破裂音/g/であられる。

[kami]甕 → [mimɣami]耳付き瓶
 [ki:]木 → [matsɿgi:]松の木
 [ku:]粉 → [mamigu:]豆の粉

日本語との対応が不明な単語で、語頭に有聲破裂音/g/をもつ語がみられる。
 [gaba:gaba]古い, [gadʒam]蚊, [gi:ra]しゃこ貝, [giʃkʷɿ]ススキ, [gura]喉仏, [go:ra]苦瓜

その他の語例

/gɿ/ [tugʷɿ]研ぐ, [ŋgʷɿ]抜く, [pagʷɿ]剥ぐ
 /gi/ [ginno:]げんのう, [agi]陸
 /ga/ [gaba:fu:]曾祖父, [gabaŋma]曾祖母, [gabjo:gabjo]瘦せた, [gama]洞穴, [gadʒɿmagi:]榕樹
 /gu/ [guʃi:]御神酒, [gusɿkubi]城辺, [gurukun]グルクン, [guʃan]杖
 /gi:/ [gi:]びり, [m:gi:]芋の茎
 /ga:/[ga:na]家鴨, [ga:s]蟬, [pʷɿga:]比嘉 (地名), [aga:ta]むこう
 /go:/[nigo:]願う, [pago:]きたない
 /gu:/[gu:pu]瘤, [gu:]仲間

1.4.1.4. 破擦音

/c/[dz]と/z/[dz]は前舌音である。/c/は無声音で、/z/は有声音である。

¹⁷ 日本語の/gu/に対応するのは、/v/である。この変化もku>{の変化に順ずる。[摩擦音/v/の項参照。]

(1) 無声の前舌破擦音/c/

/ci/ — /c₁/[ts₁ʃ]血, [m₁ts₁]道, [f₁ts₁]口

/cu/ — /c₁/[ts₁ka]柄, [ts₁mi]爪, [ts₁nu]角

その他の語例

/c₁/ [ts₁ga]升, [ts₁gu₁]瓢箪, [ts₁tu]土産, [ts₁k^əʃu]月、月夜、
[ts₁papa]蒞

/ci/ [ftʃim:]朽ち芋 (病気の芋)

/ca/ [tsaŋk^ə]削る, [kətsa]蚊帳

/cu/ [m₁tsu]味噌、

/c₁/ [ats₁:ats₁]暑い

/ca:/ [po:t₁sa:]包丁

/co:/ [m₁ts₁o:]味噌は、[kəts₁o:]蚊帳を

/cu:/ [tsu:t₁su:]強い、[katsu:]鏝節、[m₁tsu:]味噌を

(2) 有声の前舌破擦音/z/

有声破擦音/z/は、日本語のザ行の各段、ダ行のイ段、ウ段の音節の子音に対応してあらわれる。いわゆる四つ仮名の区別がなく、いずれも/z₁/に統一されている。日本語との基本的な対応は以下のとおりである。

/za/ — /z₁/ [dzaʃk^ə]座敷, [kudzara]小皿

/zi/ — /z₁/ [dz₁mami]落花生 (「地豆」に対応)、[tudz₁]妻

/zu/ — /z₁/ [midz₁]水

/ze/ — /zi/ [kadzi]風, [dʒiŋ]銭

/zo/ — /zu/ [kudzu]去年, [m₁dzu]溝

その他の語例

/z₁/ [dz₁buŋ]時分、頃合い、[dz₁naɣva]脳、[dz₁ju]囲炉裏、
[adz₁ma:adz₁ma]甘い

/zi/ [dʒiŋ]膳、[adz₁kuj₁]シャコ貝

/za/ [dzaka]じゃこうねずみ、[kadza]臭い、[kadzaʃmu]風下、
[ffudzata]黒砂糖、[adza]兄、[budza]伯父

/zu/ [dzuri]酌婦、[nudzum]望む
/zɪ:/ [dzɪ:]地面、[dzɪ:]痔、[dzɪ:guru]独楽
/zo:/ [dzo:kai]いい、[dzo:]門、[pudzo:]煙草入れ
/za:/ [adza:]兄は、[budza:]叔父は
/zu:/ [dzu:]尾、[dzu:]さあ(勧誘の感動詞)、[dzu:miga]おたまじゃくし

1.4.3. 摩擦音/f, v, s, h/

平良方言の摩擦音は無声摩擦音の/s//f//h/、有声摩擦音の/v/である。

/f//v/は唇歯音で、/s/は舌先音、/h/は声門音である。声門摩擦音/h/は、語例もすくなく、例外的、周辺的なものである。

1.4.3.1. 唇歯摩擦音/f//v/

(1) 無声の唇歯摩擦音/f/

これまでの調査で/f/が/ɪ/と結合した用例をみつけないことはできなかった。平良方言の/f/と日本語の子音との対応はつぎのとおりである。

/ku/ — /f/ [ftsɪ]口、[fmu]雲

/hu/ — /f/ [fɲi]船、[fta:tsɪ]二つ

奥舌の狭母音*uと結合する*pが摩擦音/f/や/h/になるのは、宮古八重山方言群に共通の現象であり、これは上村(1989)のいう「おしひろげ」現象による音韻変化であって、強い呼気によって唇がおしひろげられた結果、破裂音pが摩擦音[f]に変化したためであろう。

また、*kur-がff-となる。*ku>*fu>fのようにしてできた[f]の影響(進行同化)によって後続する-ru、-raの[r]が摩擦音化したものである。

/kuro/ — /ffu/[ffukaɪ]黒い

/kura/ — /ffa/[ffakaɪ]暗い、[maffa]枕

音節をひらく位置(C₂)にたつ摩擦音/f/は、かならず2拍以上のながい音節内にあらわれる。/f/が音節をひらく位置にきて、みじか母音と結合するときには、その音節のまえにC₁としての[f]があり、C₂として語頭(あるいは音節頭)にたつときには、なが母音と結合するのが原則である。

①[ffatsɿ]鯷、[ffi]イカの墨、[ffu]閉じる

②[fo:]食べる、[fa:n]食べない、[fi:n]呉れる

その他につぎのような語例がある。

/f/ [fsa]草、[ifsa]戦、[to:f]豆腐

/fi/ [ffi]イカの墨、[ffitatsɿkʰɿ]先月

/fa/ [ffantsa]野甘草、[miffasa]姪ましさ

/fu/ [ffugi]陰毛、[ffubuki]煤、[ffukani]鉄

/fi:/ [fi:bi:]与える側

/fa:/ [ffa:ffa]暗い、

/fo:/ [fo:bi:]食べる側、[ffo:ffu]黒い（程度強調の形）

/fu:/ [fu:dzɿki]ほうずき、[ffu:ffu]黒い

(2) 有声の唇歯摩擦音/v/

/v/と日本語の子音との対応はつぎのとおりである。/v/も舌先母音とは結合しないようである。

/bu/ — /v/ [ayva]油、[pav]蛇（「ハブ」に対応か）

/gu/ — /v/ [do:v]道具

その他に次のような語例がある。

/v/ [yva]おまえ、[timpav]虹（「天の蛇」に対応）、[maukja:]前、

[yvata:]おまえたち

/va/ [ayva]油、[yva]おまえ、[yvata:]おまえたち

/vi/ [ayvi]炙れ

/vi:/ [jayvi:]破れて

/va:/[va:]豚、[va:bi]上、[va:tsɿkʰɿ]天気、[ayva:ayva]脂こい

[va:]豚、[va:bi]上、などにみられる/va/はこれまで/wa/のように記述されることが多かったが、このときの子音は上下の唇を調音点として発音されるのではなく、下唇の内側と上の歯とが触れるか触れないかぐらいのせばめをつくって発話される唇歯の摩擦音あるいは半母音であるが、摩擦がよわくほとんどきこえない。口もとを注意深く観察していなければ、/w/に間違えてしまう。

この/v/[v]は、話者によって/w/に変化してしまっていることもある。また、/vva-/のように語頭に子音/v/がかさなるとき、最初の/v/は呼気もあまり強くなく、摩擦もよわいので、[u]のようにきこえるが、このときも依然として上歯と下唇とのあいだにせばめが形成される。これは両唇をまるめる母音[u]とはちがうものである。この摩擦のよわい[v]も/v/のバリエントである。

1.4.3.2. 無声の舌先摩擦音/s/

/s/は、日本語のサ行の子音/s/に対応してあらわれる。

/sa/ — /sa/ [s̺a]砂糖, [sara]皿

/si/ — /s/ [s̺ma]島, [is̺]石, [s̺ta]下, [pus̺]星

/su/ — /s/ [s̺m]墨

/se/ — /si/ [s̺j̺kiŋ]世間, [aʃi]汗

/so/ — /su/ [sudi]袖, [fsu]糞, [m̺tsu]味噌

日本語の/sir-/が平良方言で/ss-/[s̺s-]となる。

/siro/ — /ssu/[s̺sukaŋ]白い、

/sira/ — /ssa/[s̺sam]しらみ, [paʃsa]柱

これは第一音節目の[s̺]の影響による順行同化の結果である。平良方言をはじめとする宮古諸方言の流音の[r]はさまざまな条件のもとで先行する音節、フォネームの影響によって変化をこうむりやすく、他の子音に変化している。その他につぎの語例がある。

/s/ [s̺san]知らない, [s̺tiŋ]捨てる

/si/ [s̺ina]シジミ、浅蜷などの小さな貝, [s̺indaŋgi:]柁櫃、[s̺inʃi:]先生、
[s̺j̺kitaŋayva]石油

/sa/ [saba]草履, [sana]傘, [kaʃa]笠, [sabʻɪ]錆, [saʃama]坂, [saʃki]酒

/su/ [suba]側, [suba]ソバ, [sunuŋ]モズク, [s̺uku]底, [fs̺uku]不足、
[s̺kara]塩辛い

/si:/ [si:tu]生徒, [guʃi:]神酒, [piʃi:piʃi]寒い

/sa:/[sa:ju:]白湯, [sa:ru]かまきり, [asa:asa]浅い, [fa:fa]臭い

/so:/[so:]竿, [so:ga]生姜, [so:ju]醤油, [so:ki]ザル, [s̺so:s̺su]白い、

/su:/[su:]潮水, [su:]野菜, [su:di]しよう, [p^hsu:p^hsu]広い

1.4.3.3. 有声の舌先摩擦音/z/

/z/は、つねに音節をひらく位置にくる子音で、しかもつねに舌先母音/ɪ/に続いている。/ɪ/のつよい摩擦の影響によって後続する流音/r//j//w/が摩擦音に変化してできたものである^(註18)。

/zi/ [ˈɪzi]入れる, [aˈɪzi:]言って

/za/ [ˈɪzara]鎌, [ˈɪzɑp]叱らない, [paˈɪzɑp]入らない, [aˈɪza]言おう

/zu/ [ˈɪzu]魚, [ˈɪzu:]魚を

/zo:/[ˈɪzo:]魚は

/zju:/[nuˈɪzu:]糸

1.4.3.4. 声門摩擦音/h/

摩擦音/s//f//v/のほか、きわめて少数であるが、無声の声門摩擦音/h/を有する単語が平良方言にもみられる。日本語の/h/に対応する平良方言の子音は、/p/なので、原則的には、声門摩擦音/h/はあらわれないはずであるが、つぎのような感動詞や外来の単語に/h/がみられる。

[ha:i]よびかけのことば, [hai]よびかけのことば

[ha:ri:]旧暦五月四日に行なわれる巴龍船競争の行事

[hakuru]白露, [hi:dzi:]ふだん, [hun]本^(註19)

1.4.4. 鼻音/m, n/

鼻音には、両唇音の/m/と舌先音の/n/がある。/m//n/ともにC₁・C₂・C₃の位置にすることができる。鼻音も舌先母音/ɪ/とは結合しないようである。

18 破擦音/dz/と相補分布をなし、/dz/のアロフォンとみることもできるが、ここでは別のフォネームとしておく。また、/ɪ/を母音として機能する音節をつくる子音とみると、そのアロフォンとみることもできる。

19 [hun](本)の発音について、話者たちは、「フとホの中間の音で、フでもなければ、ホでもない」と話してくれた。宮古諸方言話者のいう典型的な「フ」とは[f]あるいは[ɸ]のことであるから、[hu]をこのように感じるのであろう。

(1) 両唇の鼻音/m/

平良方言の/m/は、日本語のマ行の子音/m/に対応してあらわれる。

/ma/ — /ma/ [mai]前、[mami]豆

/mi/ — /mi/ [mim]耳、[mi:ts₁]三つ、[midz₁]水

/ m/ [m₁ts₁]道、[m₁tsu]味噌、[mim]耳

/mu/ — /mu/ [muku]繭、[mug¹]麦、

/ m/ [m₁ni]胸、[m₁:ts₁]むつつ

/me/ — /mi/ [mi:]目、[ami]雨、[jumi]嫁

/mo/ — /mu/ [mumu]腿、[muts₁]餅、[fmu]雲

C₁の位置にくる[m₁]は、どんな子音が後続しても、両唇の鼻音である。これは日本語や奄美沖縄方言群の撥音Nが後続する子音の調音点に同化してあらわれるのとおおきくことになっている。

両唇 破裂音 [mpa]いやだ、[gumpo:]ゴボウ

[m₁ba]いやだ、[jumbuni]肋骨

鼻音 [m₁ma]母

舌尖 破裂音 [mti]満杯、[mta]土、[amdira]魚籠

[mdui]巳年、[amdira]魚籠

舌尖 破裂音 [m₁ts₁]道、[m₁tsu]味噌

[mdz₁munu]まずいもの、[mdzu]溝

摩擦音 [msuna]ふだんそう（野菜）

鼻音 [m₁ni]胸、[m₁nagu]砂、[m₁naka]真ん中

奥舌 破裂音 [amkupi]魚を捕る竹籠

[amgai]あぐら、[kamgi]馬のたてがみ、鶏冠

その他の語例

/m/ [midum]女、[m₁na]皆

/mi/ [midum]女、[minaka]庭、[mitʃa:ɾ]三人、[imi]夢、[sammin]計算、

[kami]亀

/ma/ [maukja:]真向かい、[manata]蛙、[maffa]枕、[kama]むこう、[sma]

相撲、[ja:ma]八重山

/mu/ [munu₁]ことば、[mumuti]百年、[mušsu]筵、[šmu]下、[jumunu]鼠
 /mi:/ [mi:]穴、[mi:uš]雌牛、[imi:imi]小さい
 /ma:/ [ma:ma]継母、[ma:su]塩、[ma:ɿ]毬、[ama:ama]甘い、
 [kuma:kuma]細かい
 /mo:/ [mo:ki]儲け
 /mu:/ [mu:]ホンダワラ(海草)、[umu:]思う、[kamu:]かまう

(2) 舌先の鼻音/n/

平良方言の/n/は、日本語のナ行の子音/n/と対応してあらわれる。

/na/ — /na/[nabi]鍋、[na:]名、[pana]鼻・花、[nam]波、[naka]中、

/ni/ — /ni/[ni:]荷、

/n/ [dʒin]お金(「銭」に対応)

/nu/ — /nu/[nunu]布、[nudu]喉

/n/ [in]犬、[k^ɿin]着物(「きぬ」に対応)

/ne/ — /ni/[ni:]根、[a_ɲni]姉、[f_ɲni]船

/no/ — /nu/[nunu]布、[nukug^ɿ:]鋸

C₁の位置にくるmが後続する子音C₂に同化せず、いかなる調音点の子音をも後続させるのに対して、C₂の子音が両唇を調音点にする子音であるとき、nはC₁にくることができないという制約がある。また、軟口蓋を調音点とする子音が後続するとき、ŋになる。

[ndza]どこ、[ɲnama]今

[ŋg^ɿ]棘、[ŋkja_f]海ぶどう(センナリズタ・海草の一種)

その他の語例

/n/ [ɲnuts₁]命、[ndza]どこ、[ŋg^ɿ]とげ、[ŋkja:ɲ]昔

/ni/ [ɲibuta]できもの、[ɲigo:]シャコ貝、[ɲiʃ]北、[ɲiv]寝る、

[ɲiv:ɲiv]遅い、[ɲiŋgin]人間

/na/ [naba]垢、[nada]涙、[kanama₁]頭、[ɲmagu]砂、[panata]崖

/nu/ [nu^ɿɰu:]糸、[nubui]首、[kanu]あの、[ɲnuts₁]命、

[nuf:nuf]温かい

/ni:/ [pi:ka]遅く、[pi:kʰɪ]寝息
 /na:/ [na:]名、[ukʰɪna:]沖縄
 /no:/ [no:]何、[no:s]直す、[no:ɪ]実る、[ʃi:no:]飾
 /nu:/ [nu:]野、[nu:]縫う、[nu:ɪ]乗る、[nu:ma]馬、[kʰɪnu:]昨日

1.4.5. 流音/r/

平良方言の流音は、はじき音の/r/である。平良方言の流音/r/は、古代語と同様に語頭にたちにくい。また、先行するせま母音/i//u/の空気力学的な影響によって同化現象をうけて、摩擦音に変化していて、本来/r/があらわれる単語も減っていて、語例はおおくない。

平良方言の/r/は、日本語のラ行の子音/r/に対応してあらわれる。

/ra/ — /ra/[sara]皿、[tura]寅、[bara]藁

/ri/ — /ɪ/[piɪ]針、[tuɪ]鳥

/ru/ — /ɪ/[juɪ]夜、[saɪ]申

/re/ — /ri/[kuri]これ、[arari]襪

/ro/ — /ru/[fkuru]袋、[duru]泥、[iru]色

その他の語例

/ri/ [pari]畑

/ra/ [garasa]カラス、[aparagi]美人、[jarabi]子ども(童)、[mara]男性器

/ru/ [kʰɪ:ru]黄色、[ukiru]起きろ、[tatiru]建てろ

/ri:/ [ri:]例、[ri:]利子、[jaburi:]破れて(中止形)、[puri:puri]馬鹿な

/ra:/[ara:]外、[sɯkara:sɯkara]塩辛い

/ro:/[aro:]洗う、[naro:]習う、[piro:]つきあう、[kʰɪ:ro:kʰɪ:ru]黄色い

/ru:/[suru:]揃う、[maru:maru:]短い、[kʰɪ:ru:kʰɪ:ru]黄色

1.4.7. 半母音/j/

平良方言の半母音は、前舌の/j/のみである。日本語や奄美沖縄方言群にみられる半母音の/w/は、宮古諸方言や八重山諸方言、与那国方言などの宮古八重山方言群では/b/に変化している。また、かつて平良方言に/w/が存在する

かのような記述がみられたが、それはおそらくC₂の位置にくる唇歯の摩擦音vを観察しそこなったものであろう。筆者もかつておなじまちがいをしている。このvの聞き取りそこねたものか、あるいは日本語の影響によって、あるいは方言内部の自然な音韻変化によってあたらしくwに変化したのであろう。

平良方言の/j/は、日本語のヤ行の子音/j/に対応してあらわれる。

/ja/ — /ja/ [jama]山, [ja₁]槍, [kaja]茅

/ju/ — /ju/ [ju:]湯, [jum]弓, [maju]眉

/jo/ — /ju/ [jumi]嫁, [juk^{*1}]斧 (よき), [juku]横

その他の語例

/ja/ [japa:japa]柔らかい, [jai:jai]痩せた(形容詞), [jadu]戸

/ju/ [juda]枝, [juda₁]誕, [juni]粟, [juv]粥, [ju₁]夕食, [junu]同じ,
[jusarabi]夕方

/ja:/[ja:tsu₁]八つ, [ja:ni]来年, [ja:s]飢饉, [ja:di]家族, [ja:ti]八年

/jo:/[jo:u₁]お祝い, [jo:ra]腰, [jo:ka]八日, [jo:]硫黄, [jo:jo:]弱い

/ju:/[ju:na]ユウナ, [ju:tsu₁]四つ, [ju:sa]ブランコ, [ju:duri]夕風

1.4.8. 口蓋音化を特徴とする子音

平良方言の口蓋音化を特徴とする子音は、以下のものである。

/j, pj, bj, tj, dj, kj, gj, cj, zj, fj, vj, sj, mj, nj, rj/

平良方言の口蓋音化を特徴とする子音は、対応する口蓋音化を特徴としない子音とペアをつくっている。

pj	bj	tj	dj	kj	gj	fj	vj	sj	cj	zj	mj	nj	rj
p	b	t	d	k	g	f	v	s	c	z	m	n	r

口蓋音化を特徴とする子音のうち/j/はペアになる口蓋音化を特徴としない子音をもたないが、この/j/は口蓋音化を特徴とする子音と口蓋音化を特徴としないフォネームのむすび目になるもので、日本語五十音図では/j/をふくむ音節は直音の系列にふくまれている。

語末に前舌せま母音/i/がくる平良方言の名詞は、格助辞[-ju]や、とりたて助辞[-ja]がつくと、語幹末の母音と助辞が融合して口蓋音化した子音があ

らわれる。

[nabi]鍋	[nabju:]鍋を	[nabja:]鍋は
[pʉti]痣	[pʉtju:]痣を	[pʉtja:]痣は
[sudi]袖	[sudju:]袖を	[sudja:]袖は
[saki]酒	[səkju:]酒を	[səkja:]酒は
[kagi]影	[kagju:]影を	[kagja:]影は
[ffi]イカの墨	[ffju:]墨を	[ffja:]墨は
[afi]汗	[afu:]汗を	[afa:]汗は
[kadʒi]風	[kadʒu:]風を	[kadʒa:]風は
[mami]豆	[mamju:]豆を	[mamja:]豆は
[puɸi]骨	[puɸu:]骨を	[puɸa:]骨は
[pari]畑	[parju:]畑を	[parja:]畑は

語例はすくないが、日本語の口蓋音化を特徴とする子音に対応してあらわれるばあいがある。その単語のおおくが漢語に由来するものである。

漢語：[tʃa:]お茶、[tʃu:dzara]中皿、[kjo:dai]兄弟、[pja:ku]百、[dʒu:]十
和語：[kju:]今日、[tʃu:dzɪgani]洗面器（手水金）

先行する前舌せま母音/i/の影響で口蓋音化する例が、すくないけれども、みられる。この先行する前舌せま母音/i/による口蓋音化は、15世紀に琉球王府によって編纂された「おもろさうし」にもっとよくみられるもので、奄美方言や沖縄方言にもみられるものであるが、奄美沖縄方言群に比較すると、平良方言をはじめとする宮古諸方言にはあまりみられないようである。

/pja/ [pjauna]平安名（地名）

/pja:/ [pja:pja:]早い

/pju:/ [pju:ɿ]日取り

/bja/ [bjafʼuʃ]耕作用の牛、[kubjaʃmja]甲イカ、[babja]鯛の一種

/bja:/ [nabja:ra]へちま、[uibja:]指は

/bjo:/ [gabjo:gabjo:]痩せている（形容詞）

/bju:/ [bju:ɿ]酔う、[uibju:]指を

/tja:/ [mutja:]分は、[asatja:]明後日は

/tju:/ [mutju:]分を、[asatju:]明後日を
 /dja:/ [idja:n]出会わない、[udja:]腕は
 /djo:/ [idjo:]出会う
 /dju:/ [udju:]腕を
 /kja/ [ikjama]池間島、[ikjaraka₁]少ない、[ɲkjaɸ]センナリズタ（海草の一種）、[ɲkjadura]荷川取（地名）、[ikja]イカ、
 /kja:/ [taɸkja:]一人、[ɲkja:n]昔、[kja:gi]棋、[kja:s]消す
 /kjo:/ [dakkjo:]ラッキョウ
 /gja/ [tugja]棘、[guŋgja]おんぶ、[ɲgjamaɸ]うるさい、[ɲgja₁]胆嚢、
 [ts₁gja]鷹をとる仕掛け
 /gja:/ [nagja:ɸ]長く（副詞）、[ɲgja:ɲgja]苦い
 /gju:/ [kagju:]影を
 /fja/ [ɸɸjama]来間島
 /fja:/ [ɸɸja:]（イカの）墨は
 /fju:/ [ɸɸju:]（イカの）墨を
 /vja/ [ɸvjamaɸ]羨ましい
 /sja:/ [ɸa:ka]早朝
 /sjo:/ [ɸo:gats₁]正月、[ɸo:ɸim₁mami]緑豆
 /sju:/ [ɸu:]祖父、[ɸu:kan]小寒（二十四節季のひとつ）
 /cja/ [ɸɸaban]茶碗
 /cja:/ [kuitɸa:]クイチャー（踊りの名称）、[natɸa:ra]海入草
 /cjo:/ [ɸɸo:ki]茶請け
 /cju:/ [ɸɸu:ka]急須
 /zja/ [ɸɸzagu]雑魚
 /zja:/ [ɸɸza:nna]だけ（形式名詞）、[ɸɸza:na]同士
 /zjo:/ [ɸɸzo:to:]上等、[ɸɸzo:buŋ]もういい、[ɸɸzo:gu]上戸
 /zju:/ [ɸɸzu:]十、[ɸɸzu:gats₁]十月、[ɸɸzu:rukunits₁]十六日（小正月）
 /mja:/ [ɸmja:ku]宮古、[ɸmja:rabi]女郎、[a¹ɲk¹ɲmja:]歩き比べ、[baka¹ɲmja:]
 奪い合い、[tu₁mja:]取り合い、[im₁mja:]クラゲの一種

/mju:/[mju:tu]夫婦、[mju:ɿ]姪甥、[mju:ɲi]船の敬称
 /nja/ [ɲnada]まだ、[na:bi]真似、[na:ɲa:da]薬指、[juɲa:n]晩、[iɲa:]
 西隣
 /nju:/[fɲu:]船を、[puɲu:]骨を
 /rja/ [imburja]海狂い
 /rja:/ [ararja:]襦は、[parja:]畑は
 /rju:/ [ararju:]襦を、[parju:]畑を

1.4.9. 唇音化を特徴とする子音

平良方言の唇音化を特徴とする子音は/kw, gw, w/のみつつである。/w/は不安定で、/kw//gw/も沖縄諸方言に比較して、語例もすくなく、周辺的なフォネームである。

	首里方言	平良方言
菓子	[kwa:ʃi]	[ko:ʃ]
子	[kkwa]	[ffa]
枕	[makkwa]	[maffa]
カボチャ	[naɲkwa:]	[naɲko:]
呉れる	[kwi:n]	[fi:ɿ]
肥料	[kwe:]	[ffai]

/kwa/[kwampa]喪主のきる袴状の衣服。

/gwa/[gwanjaku]丸薬、[gwansu]先祖

1.4.10. なが子音

平良方言の子音には、その子音一個で2モーラ拍にかぞえることのできる、なが子音がある。平良方言のなが子音は、有声摩擦音のなが子音/v:/、鼻音のなが子音/m:/、/n:/である。

/v:/ [v:ʃ]節（首里方言[gu:ʃi]に対応、[iy:iy]重い

/m:/ [m:]甘藷、[m:nuɿ]芋練り、[m:gi:]芋の茎、[jam:jam]痛い

/n:/ [n:kai]似ている、[n:n:]似ている（重複形）

1.5. 単語のリズム＝フォネーム構造

1 モーラのみじかい音節を○で、2 モーラのながい音節を○でしめすと、平良方言の単語のリズム＝フォネーム構造はつぎのとおりである。平良方言には1音節1モーラの単語はなく、最小の音節構造は1音節2モーラである。

※ 111頁の音節一覧表は、みじかい音節を中心に示しているが、当該のみじかい音節の語例がないところは、ながい音節（ながい母音をふくむ音節）でしめしている。

【参考文献】

- 上村幸雄(1997)「音声研究と琉球方言学」(『ことばの科学8』むぎ書房)
- 上村幸雄(1996)「日本語音声の歴史的なふかさと地域的なひろがり」(『沖縄言語研究センター資料No.131』)
- 上村幸雄(1992)「母音の調音音声学的記述の方法－IPAの1989年改訂に関連して－」(『沖縄言語研究センター資料No.100』)
- 上村幸雄(1992)「acute accentとgrave accent」(『沖縄言語研究センター研究報告I』 琉球列島の音声の収集と研究I)
- 上村幸雄(1991)「琉球列島の言語」(『言語学大辞典』)
- 上村幸雄(1990)「日本語の母音、子音、音節－調音運動の実験音声学的研究－」(国立国語研究所報告100 (高田正治と共著))
- 上村幸雄(1989)「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか(2)－琉球列島諸方言のばあい－」(『沖縄言語研究センター資料No.79』)
- 上村幸雄(1987)「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか－英語のGreat Vowel Shiftについての考察－」(『沖縄言語研究センター資料No.67』)
- 上村幸雄(1983)「単語のリズム・アクセント的構造の分析方法について－今帰仁村与那嶺方言を例として－」(『沖縄言語研究センター資料No.39』)
- 上村幸雄(1978)『X線映画資料による母音の発音の研究－フォネーム研究序説－』
- 上村幸雄(1972)「琉球方言入門」(『言語生活』251号)
- 内間直仁(1984)「宮古諸島の方言」(『講座方言学10－沖縄・奄美地方の方言－』)

音節数	リズム構造	フォネーム構造	語 例
1 音節	○	V: CV: C:	/a:/泡、/i:/胃、/u:/追う /mi:/目、/ti:/手、/bu:/緒 /m:/芋、/v:/売る、/n:/うん
2 音節	○○	VCV CVCV CCV VC CVC	/ica/板、/udi/腕 /naba/垢、/miz ₁ /水 /ffa/子、/mta/土、/nka/糠 /im/海、/un/鬼、/af/菓子 /kuv/昆布、/num/蚤、/kan/蟹
	○ ○	VCV: CCV: CVCV:	/ara:/外 /ino:/内海 /ffa:/子は、/mma:/祖母は /butu:/夫を
	○ ○	V:V CV:V V:CV CV:CV C:CV C:C CV:C CCCV	/a:i/いいや (返事)、/u: ₁ /瓜 /ma: ₁ /毬、/fi: ₁ /呉れる /u:du/布団、/a:sa/あおさ (海草) /ka:ra/瓦、/ja:su/飢饉 /m:ku/膿、/m:mi/熱して /v:s/串、/s:v/冬瓜 /to:f/豆腐、/nja:n/無い /ftca/鯨、/mtca/道は
	○ ○	V:V: CV:CV: C:CV: C:CVV CCCV: CV:C: C:C:	/o:o:/青い /jo:jo:/弱い、/tu:tu:/遠い /m:gi:/芋の茎 /n:ka ₁ /似ている /ftca:/鯨は /ni:m:/煮芋 /n:n:/似ている

平良方言の音節一覽表

ɿ	i	a	o:	u	ja	jo:	ju
[ʰɿ][ʰi][ɿ]	[i]	[a]	[o:]	[u]	[ja]	[jo:]	[ju]
	hi:	ha		hu			
	[hi:]	[ha]		[hu]			
kɿ	ki	ka	ko:	ku	kja:	kjo:	kju
[kʰɿ]	[ki]	[ka]	[ko:]	[ku]	[kja:]	[kjo:]	[kju]
gɿ	gi	ga	go:	gu	gja		gju:
[gʰɿ]	[gi]	[ga]	[go:]	[gu]	[gja]		[gju:]
	ti	ta	to:	tu	tja:		tju:
	[ti]	[ta]	[to:]	[tu]	[tja:]		[tju:]
	di de:	da	do:	du	dja:	djo:	dju:
	[di] [de:]	[da]	[do:]	[du]	[dja:]	[djo:]	[dju:]
pɿ	pi	pa	po:	pu	pja		pju:
[pʰɿ]	[pi]	[pa]	[po:]	[pu]	[pja]		[pju:]
bɿ	bi	ba	bo:	bu	bja	bjo:	bju:
[bʰɿ]	[bi]	[ba]	[bo:]	[bu]	[bja]	[bjo:]	[bju:]
cɿ	ci	ca	co:	cu	cja	cjo:	cju:
[tsɿ]	[tʃi]	[tsa]	[tso:]	[tsu]	[tʃja]	[tʃjo:]	[tʃju:]
zɿ	zi	za	zo:	zu	zja	zjo:	zju:
[dzɿ]	[dʒi]	[dza]	[dzo:]	[dzu]	[dʒja]	[dʒjo:]	[dʒju:]
s	si se:	sa	so:	su	sja:	sjo:	sju:
[ʃ]	[ʃi] [ʃe:]	[sa]	[so:]	[su]	[ʃja:]	[ʃjo:]	[ʃju:]
	ʒi	ʒa	ʒo:	ʒu			ʒju:
	[ʒi]	[ʒa]	[ʒo:]	[ʒu]			[ʒju:]
f	fi	fa	fo:	fu	fja		fju:
[f]	[fi]	[fa]	[fo:]	[fu]	[fja]		[fju:]
v	vi	va	vo:		vja		vju:
[v]	[vi]	[va]	[vo:]		[vja]		[vju:]
n	ni	na	no:	nu	nja		nju:
[ŋ]	[ni]	[na]	[no:]	[nu]	[nja]		[nju:]
m	mi me:	ma	mo:	mu	mja		mju:
[m]	[mi] [me:]	[ma]	[mo:]	[mu]	[mja]		[mju:]
	ri	ra	ro:	ru	rja		rju:
	[ri]	[ra]	[ro:]	[ru]	[rja]		[rju:]

- 内間直仁(2004)「古代日本語のワ行子音の[b]音化について」(『国語学』第55巻2号、日本語学会)
- 加治工真市(1977)「音韻」(『琉球の方言－宮古大神島－])
- 加治工真市(1989)「宮古方言音韻論の問題点」(『沖縄文化－沖縄文化協会創設40周年記念誌－])
- かりまたしげひさ(2002)「宮古方言研究のこれまで・これから」(『国文学解釈と鑑賞』7月号)
- かりまたしげひさ(1999)「音声の面からみた琉球諸方言」(言語学研究会編『ことばの科学』第9号)
- かりまたしげひさ(1996)「空気力学的な観点から見た宮古諸方言の音韻変化についてのおぼえがき」(『言語学林96-97』三省堂)
- かりまたしげひさ(1993)「大神島方言のフォネームについて」(『日本語音声』琉球列島班研究成果報告書－琉球列島における音声の収集と研究－)
- かりまたしげひさ(1993)「宮古大神島方言のフォネームについてのおぼえがき」(『沖縄文化』78号)
- かりまたしげひさ(1987)「宮古方言の成節的な子音をめぐって」(『琉球方言論叢』)
- かりまたしげひさ(1986)「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」(『沖縄文化』66号、沖縄文化協会)
- かりまたしげひさ(1984)「宮古方言のフォネームはいかに記述されてきたか」(『沖縄言語研究センター資料No.53』)
- かりまたしげひさ(1982)「宮古方言のフォネームについて」(『琉球の言語と文化』)
- 崎山 理(1963)「琉球・宮古方言比較音韻論」(『国語学』54、国語学会)
- 沢木幹栄(2000)「宮古方言の問題点」(『音声研究』4-1日本音声学会)
- 柴田 武(2002)「九州・沖縄方言の2つの音声変化」(『国語学』第53巻1号、国語学会)
- 柴田 武(1981)「沖縄平良方言の音韻体系」(『方言学論集1』)
- 柴田 武(1972)「琉球方言について」(『全国方言資料 琉球編Ⅱ』)

- 仲宗根政善(1962)「琉球方言概説」(『方言学講座』第4巻)
- ニコライ・A・ネフスキー(1926)「アヤゴの研究」(『民族』第1巻3号、『月と不死』(N・ネフスキー著、岡正雄編(1971)平凡社所収))
- 服部四郎(1951)『音声学』
- 平山輝男(1964)「琉球宮古方言の研究」(『国語学』56、国語学会)
- 平山輝男編(1983)『琉球宮古諸島方言の基礎語彙の総合的研究』
- 宮古学術調査(1968)『宮古諸島学術調査報告(言語・文学編)』
- 本永守靖(1978)「平良方言の形容詞」(『琉球大学教育学部紀要』17)
- 本永守靖(1973)「平良方言の動詞の活用」(『琉球大学教育学部紀要』22-1)
- 本永守靖(1972)「平良方言の音韻法則」(『琉球大学教育学部紀要』16)